モーサ1,,モーサヤ書　第1章
モーサ1,*-*,ベンジャミン王、その息子たちに訓戒を与える。モーサヤ選ばれて父の後をついで王の位につく、モーサヤ記録を受けとることなど。
モーサ1,1,さてゼラヘムラの全地には、ベンジャミン王の司どる全国民の中にもう不和が起らなかったので、ベンジャミン王は残る生涯をいつも安らかに送った。
モーサ1,2,ベンジャミン王には3人の息子があって各々モーサヤ、ヒローラム、ヒラマンと読んだが、王はこの3人を智恵のある者にしてその先祖が主から授かって伝えたいろいろの予言をかれらに知らせようとし、先祖の言葉をみな3人に習わせた。
モーサ1,3,また真鍮版に刻んだ記録についても3人に教えて言った"私の息子たちよ、この記録と命令とをのせているこの版がもしなかったならば、私たちは今でさえも神の奥義を知らずに無知のままであったにちがいない。私はお前たちがこれをよく憶えておくように望む。
モーサ1,4,なぜならば、もしこの真鍮版の助けを借りなかったならば、私たちの先祖のリーハイもこれらのことを皆記憶して、子孫に教えてこれを伝えることができなかったであろう。リーハイはエジプト人の言葉を学んだからこの真鍮版を学んだからこの真鍮版に刻んであること
モーサ1,4-1,それを子孫に教えたから子孫はまたそれをその子たちに伝えることができた。このようにして神の命令は今日になるまで守られてきた。
モーサ1,5,私の息子たちよ、お前たちよ、お前たちによく言っておく。このいろいろな記録が神の御手によってとっておかれたのは、私たちが神の奥義を読んでこれを覚り、常に神の命令を私たちの眼の前に置くためであって、もしもこの記録がなかったならば、私たちの先祖でさ
モーサ1,5-1,無信仰に陥り、私たちもまた兄弟のレーマン人のような者になったであろう。レーマン人は真鍮版にのっているこのようなことを少しも知らず、たとえこれを教えられてもその先祖の正しくない伝説のために信じないのである。
モーサ1,6,私の息子たちよ、私の望むのはお前たちがこの言葉もまたこの記録も本当であることを忘れないでいてくれることである。ごらん、私たちの先祖がエルサレムを立ち去ってから今日に至るまでの先祖の言ったこととその記録とがのっているニーファイの版は真実である。
モーサ1,6-1,私たちはそれを今眼の前に持っているからその確であることを知っている。
モーサ1,7,さて、私の息子たちよ、願わくはお前たちがこの記録によって利益を受けるよう努めてこれを研究し、またお前たちが主が私たちの先祖に立てたもうた約束通りこの土地で栄えるために神の命令を守れ"と。
モーサ1,8,ベンジャミン王はこのほか本書にのっていない多くのことをその息子たちに教えた。
モーサ1,9,息子たちに教訓を与えてから、ベンジャミン王は年をとって自分もやがて世の人が皆行かねばならぬ道を行かねばならぬことを悟ったので、王の位を1人の息子にゆずる必要があると考えた。
モーサ1,10,それで王はモーサヤを自分の前に来させ、次のように戒めて言った"わが子よ、私は全国民の人民すなわちこの地に住むゼラヘムラの民とモーサヤの民とを集めるために、お前からこれらの者に布告をしてもらいたい。それは明日私が自分の口から汝が私たちの主なる神
モーサ1,10-1,与えたもうたこの民の王であり支配者であると、私の民に宣言しようとするからである。
モーサ1,11,その言う私はこの民に名前をつけて、主なる神がエルサレムの地から導き打足たもうたあらゆるほかの民から区別をしよう。私がこうするのはこの民が主の命令を熱心に守っているからである。
モーサ1,12,そして、私がこの民に与える名前はかれらが罪悪を犯さなければいつまでも消されない。
モーサ1,13,さらに、私はお前に言う。もしも主の大きな恵を受けているこの民が、罪悪を犯してよこしまな不義者となるならば、かれらは主に捨てられてその兄弟のレーマン人と同じように弱い者となるであろう。それであるから、主はこれまで私たちの先祖を養って守りたもうた
モーサ1,13-1,そのたぐいのない驚嘆すべき力でもはやこの民を養ってお守りにはならない。
モーサ1,14,主がもしもその御手を延ばして私たちの先祖を保護したまわなかったならば、先祖は必ずレーマン人の手に落ちてその怨みのぎせい者になっていたに違いない"と。
モーサ1,15,ベンジャミン王はこのようにその息子に言い終ってから、その王国の一切の政事を息子にゆだね、
モーサ1,16,さらに、真鍮版に刻んだ記録とニーファイの版とレーバンの剣とそして荒野を旅している間いつも私たちの先祖の道しるべをした球とを息子に預けた。この球は対するその従順さに応じて、私たちの先祖を導くために主が備えたもうたものである。
モーサ1,17,それであるから、私たちの先祖が神に不忠実となるとその旅が旨くはかどらず、かえって追いかえされて神の不興を自分たちに招いた。それであるから、主は先祖にその務めを思い出させるために飢饉とひどい艱難で苦しめたもうたのである。
モーサ1,18,さて、モーサヤは父の命令を奉じてその通り行い、ゼラヘムラ全国の民がベンジャミン王の宣べる言葉

をキックために神殿に集るように全国民に布告をした。
モーサ2,,モーサヤ書　第2章
モーサ2,*-*,ベンジャミン王その民に述べるために塔を1つ建てる。神を敬う王の義しい統治。
モーサ2,1,モーサヤがその父の命令に従って全国に富国をしたので民は国中に寄り集り、ベンジャミン王の宣べる言葉を聞こうとして神殿へやってきた。
モーサ2,2,そして集る者の数は非常に多くて数えきれないほどであった。民はすでに非常によく殖えてこの土地で強い者になっていたからである。
モーサ2,3,かれらはまた自分のもついろいろの家畜の群れからその初子をつれてきた。これはモーセの律法に従って牲と燔祭とを備えるためであって、
モーサ2,4,また主なるかれらの神に感謝をするためであった。この神はかれらをエルサレムからつれ出し、かれらをその敵の手から救だし、また正しい人々を選んでかれらの教師と定めたもうた。また正しい人であって、ゼラヘムラ地に平和を布き、しかも民が喜びたのしみ神と万
モーサ2,4-1,万民とに対して愛を抱くために神の命令を守れと民に教えた人を立ててかれらの王となしたもうた。
モーサ2,5,民が神殿に着いた時、男は各々その家族の順に従ってあちこちに天幕を張った。その家族は妻や息子や娘たちおよび孫たちであったが、長子から末子まで従順に並び、各々の家族がみな相離れて場所を取った。
モーサ2,6,民はみな神殿のまわりに天幕を張ったが、天幕の中に居ながらベンジャミン王の宣べる言葉が聞こえるように、天幕の戸口を神殿の方へ向けておいた。
モーサ2,7,ここに群がった民の数は非常に多かったので、ベンジャミン王は神殿の中に居てことごとくの人に教えを聞かせることができなかったから、王はその民に自分の話す言葉を聞かせるため1つの塔を建てさせた。
モーサ2,8,そこで王はその塔の上から民に話し始めたが王の言葉を聞く者の数が非常に多かったから、ベンジャミン王の言葉は皆の者に届かなかった。それで、王は自分の宣べる言葉を書き取らせ、これを声の届かない人たちの所へ送ってかれらにもその言葉を知らせた。
モーサ2,9,この時ベンジャミン王が話して聞き取らせた言葉は次の通りである”今日この場所に寄り集り、これから私が話そうとする言葉を聞くことのできるわが兄弟たちよ、私がお前たちに命じてここに来させたのは、私の告げる言葉を軽んじさせるためではない。それは聞くた
モーサ2,9-1,耳を開き、よく理解するために胸を開き、また神の奥義を悟るために心を開いて私の言葉に聞き従わせるためである。
モーサ2,10,私がお前たちに命じてここに集まらせたのは、お前たちに私を恐れさせるためでもなければ、私が元来死ななければならない人間以上の者であると思わせるためでもない。
モーサ2,11,私はお前たち自身と同じ者であって肉体的にも精神的にもあらゆる弱点を持っている。しかしながら、この民の支配者となり王となるようにまずこの民に選ばれ、私の父によって聖められ、主の許しを得たのであるが、主に授かった勢いと心と力とをつくしてお前たちを
モーサ2,11-1,治めるために私は主のたぐいない力に守られて今日まで生きながらえてきた。
モーサ2,12,私は今日までの生涯お前たちのための努めに費すことを許されたが、金銀そのほか何の宝もお前たちから貪り求めたことはない。
モーサ2,13,私はお前たちを牢屋に入れることも、民がお互いを奴隷にすることも殺すことも者を奪いとることも盗むことも姦淫することも、そのほかどのような罪悪であってもこれを犯すことをこれまでお前たちに許したことはなく、主がお前たちに命じたもうたすべてのことを守
モーサ2,13-1,守たなくてはならないとお前たちに教えてきた。
モーサ2,14,私はお前たちがいろいろな税をかけられず、またなにも堪え難いことに逢わないように、私自身でさえも自分の手をもって働きお前たちのために務めてきた。お前たち自身は私が話したこれらのことを皆今日証明する者である。
モーサ2,15,しかしながら、私の兄弟たちよ、私は大きなことを言うために以上のことをしたのではない、またお前たちの悪いことを非難するためにこれらのことを言うのでもない、私がこれらのことを言うのは、私が今日少しも良心に責められずに神の前に折れることをお前たちに
モーサ2,15-1,知らせるためである。
モーサ2,16,ごらん、よく言っておく。私が一生の間お前たちのために務めたと言ったのは、これを自慢したいと思って言ったのではない。私が務めたのはただに務めただけである。
モーサ2,17,ごらん、私がこれらのことを言うのはお前たちに知識を与えるためであって、またお前たちが同胞のために務めるのは、ただお前たちの神のために務めるのであることを悟らせるためである。
モーサ2,18,ごらん、お前たちは私のことをお前たちの王であると言う。もしも、お前たちの王である私でさえも真実はげんでお前たちのために務めているならば、ましてお前たちはお互いのために一生けんめいに務めなくてはな

らないではないか。
モーサ2,19,また、もしもお前たちの王と呼ばれてその生涯をお前たちのためにつくし、今になるまで神に仕えている私でさえもお前たちから感謝を受けるねうちがあるとするならば、お前たちはどのようにお前たちの天の王に感謝を捧ぐべきであろうか。
モーサ2,20,私の兄弟たちよ、よく言っておく。お前たちがたとえ全身前例の力をつくして感謝と讃美とを捧げ、お前たちを造りお前たちを助けてお前たちを養い、お前たちを守りお前たちを喜ばせお前たちが互に平和にクラスことを許したもうた神をたたえても、
モーサ2,21,また、たとえ始めからお前たちを造ってこれに息を与え、以て毎日毎日お前たちを生かし、生きて動き意志のままに行うことを赦し、時々刻々お前たちを支えておりたもうお方に、全身全霊の力をつくして仕えても、お前たちはそれでもまだ益にならない僕である。
モーサ2,22,ごらん、神がお前たちに要求なさるのは、お前たちが神の命令に従うことだけである。それで、神は"汝らもし神の命令を守らば地に栄ゆべし"と言う誓約をお前たちに立てたもうた。そして神は1度口に出したことを変えたまわないから、お前たちが神の命令を守るな
モーサ2,22-1,神は必ずお前たちを祝福して栄えさせたもう。
モーサ2,23,ごらん、まず神はお前たちを造って命を与えたもうた。それであるからお前たちは神に恩を受けている。
モーサ2,24,次に、神はその命令通に行えとお前たちに要求をなさる。もしお前たちが神の命令通に行うならば、神はその従順さをほめて直ぐに祝福を与えてこれに報いたもうた。それであるから、お前たちは今でも神に恩を受けているばかりかこれから先とこしえに恩を受けている
モーサ2,24-1,それであるから、お前たちは何を誇りとすることができようか。
モーサ2,25,お前たちに尋ねるが、お前たちは少しでも自分をほめることができるか。ほめることはできない。お前たちは大地の塵から造られた者であるが、大地の塵でさいもお前たちを造ったお方のものであるから、お前たちは自分から大地の塵にひとしい者であるとさえも言うこ
モーサ2,25-1,ことはできない。
モーサ2,26,お前たちがお前たちの王と呼んでいる私でさえもまた塵から造られたものであるから、少しもお前たち以上にすぐれてはいない。お前たちは、私が年をとって今や死なねばならぬこのからだをもとの土にかえそうとしている様を見ている。
モーサ2,27,それであるから、私は何ら責められない良心を以て神の前に歩みながらお前たちのために務めたと言ったが、神がお前たちについて私に命じたもうたことによって私を裁判なさる時に私が無罪とされるように、またお前たちの罪の血の責任が私にかからないように今お前
モーサ2,27-1,ここに寄せ集めたのである。
モーサ2,28,またお前たちに告げる。私は今やまさに墓へ入ろうとする者であるが、安らかな心で墓へ下り私の不滅の霊が天の唱歌隊に加わって正義の神を讃美するうたを唱うように、またお前立ち退罪の地の責任が私の衣服にふりかからないようにお前たちを集めた。
モーサ2,29,さらに、私がお前たちを集めたのには今1つのわけがある。それは私はこの植えお前たちの教師としてまた王として立てないことをお前たちに宣言するためである。
モーサ2,30,現在お前たちに言おうとしている時にも私の全身はへどくふるえている。しかし主寝神が私を支えてお前たちに話をさせて下さり、私の息子のモーサヤが今からお前たちの王であり、支配者であることを今日宣言せよと私に言いたもうた。
モーサ2,31,さて、私の兄弟たちよ、私はお前たちがこれからもまた今まで通に変わらないことを望む。お前たちはこれまで私の命令と私の父の命令とを守って栄え、敵の手に落ちないように守られてきたが、もしもお前たちが私の息子の命令すなわち神が私の息子の口を借りて下し
モーサ2,31-1,命令に従うならば、またこれまでのようにこの土地で栄え、お前たちの敵はお前たちに打ち勝つ力がない。
モーサ2,32,しかしわが民よ、お前たちの間に不和が起こらないように、また私の父のモーサヤが言った悪魔に喜んで従わないように気をつけよ。
モーサ2,33,悪魔に喜んで従う者には禍があるにきまっている。なぜならば、このような者がもしも喜んで悪魔の言うことを聞き、その罪を持ったまま死ぬならば、その者の身も霊も救われないからである。かれは知りながら神の律法に背きその報いとして永遠の罰を受ける。
モーサ2,34,お前たちの中でまだこれらを教えられていない小児たちのほかには、そのいろいろな持物と才能とをみなお前たちの天の御父のためにとこしえに用いなければならないことを知っていない者はなく、また私たちの先祖レーハイがエルサレムを立ち去るまでに語った聖い予
モーサ2,34-1,予言者たちの予言をのせている記録と、

モーサ2,35,また今日まで私たちの先祖が話したことについて教えを受けなかった者はない。ごらん、もろもろの予言者と私たちの先祖とは主が命じたもうたことを話したから、その話は正しくて真実である。
モーサ2,36,さて私の兄弟たちよ、私はお前たちを戒めて言う。お前たちが以上のことをみな教えられてこれを悟ってから、もしも罪を犯してこれまでに告げ知らされたことに背くならば、これがためにお前たちは主の"みたま"から遠ざかり、"みたま"はもはやお前たちに宿って
モーサ2,36-1,智恵の道に導かず、また恵と栄えと保護とを与えたまわない。
モーサ2,37,以上のような行いをする者は公然と神に背く者であって、喜んで悪魔の計りごとを聞きあらゆる義の敵となる。従って、主は清くない所に隅たまわないから、このような者に宿りたもうことはない。
モーサ2,38,それであるから、このような者がもしも悔い改めをせず、神の敵であるまま生涯を送って死ぬならば、神の正義の要求はその者の不滅の霊を呼びさまして自分に罪のあることを強烈に感じさせる。これによってかれらは主の前から退き去り、罪の自覚と　苦痛と憂いとは
モーサ2,38-1,胸に充ちてちょうどとこしえに焔を上げる消えぬ火のようである。
モーサ2,39,さてお前たちに告げる。このような人には憐みもその力が及ばないから、その最后の状態は果しない責め苦を受けることである。
モーサ2,40,今私の言ったことが解る一切の老人と青年と子供たちよ（私はお前たちがよく解るように今話をした）願わくは、お前たちが目をさまして罪悪に陥った者たちが受ける恐ろしい境涯を忘れないように。
モーサ2,41,さらに私はお前たちが神の命令を守る人々の受ける幸福なたのしい境涯をよく考えるように望む。ごらん、その人たちはこの世に関係のあることでも霊に関係のあることでもすべて職福を受けて、もし最后まで耐え忍んで忠実であるならば天に迎えられ、とこしえに幸福
モーサ2,41-1,有様で神と共に住めるのである。主なる神がこのように言いたもうから、以上のことが真実であるのを忘れずに記憶せよ"。
モーサ3,,モーサヤ書　第3章
モーサ3,*-*,ベンジャミン王の言葉のつずき。キリストに関する1つの予言。キリストの身代りの贖罪について更にくわしく語る。
モーサ3,1,"私の兄弟たちよ。私はもっとお前たちに話すことがあるから、再びお前たちが注意をするように望む。それは、将来起ることについて話すことがあるからである。
モーサ3,2,これから話すことは、神のつかわした1人の天使が私に知らせたもうたことである。その天使が私に目をさませと仰せになったから、私が目をさますと私の前に立って言いたもうた。
モーサ3,3,'見よ、われは大きな喜びの訪れを聞かせようとしてきたから、目をさましてわれの言うことばを聞け。
モーサ3,4,主は汝の祈りを聞きとどけて汝の義しさを審判したもうた。そして、汝を喜ばせるためにわれをつかわして言葉を告げさせ、また汝が自分の民に伝えて民もまた喜びに満たされるようにわれをつかわしたもうた。
モーサ3,5,現在この世を治めたまい、また無限の過去から無限の将来にわたってまします全能の主が権能をもって天から人間に降臨して土から成る身体に宿りたまい、人々の間をめぐって病人たちを医やし、死んだ者たちを活し、あしなえを歩かせ、めくらを見えるようにし、つん
モーサ3,5-1,聞こえるようにし、あらゆる病をなおし、
モーサ3,6,また人の心につく悪鬼すなわち悪魔を追いはらうなどの大きな奇跡を行いたもう時が遠からず来る。
モーサ3,7,そしてこのお方は誘惑を受け、肉体上の苦痛と飢えと渇きと疲労とを経験したもうが、これは死ななければ人間に堪え難いほどひどいものである。なぜならば、見よ、このお方は全身の毛孔から血を流したもうほどに、その民の罪悪と憎むべき行いのために苦痛を感じた
モーサ3,7-1,感じたもうからである。
モーサ3,8,このお方は神の御子、天地の父、創世の時から万物を造りたもうている造り主イエスと呼ばれ、その母はマリヤと呼ばれる。
モーサ3,9,見よ、キリストは世の人に、その御名を信ずる信仰によってさえも救いを与えるためにその民の所に来りたもう。以上のようであるにもかかわらず、その民はキリストをあたりまえの人間と思い悪魔につかれていると言って訴え、とうとう鞭うって十字架にかける。
モーサ3,10,しかし、キリストは3日目に死者の中からよみがえりたもう。見よ、その後キリストは立って世の人が義しく裁判を受けるために行われるのである。
モーサ3,11,また見よ、キリストの地は、アダムの咎のために堕落した者たちの中で、自分たちに関する神のみこころを知らないまま死んだ一切の者と知らずに罪を犯した一切の者との罪を贖う。
モーサ3,12,しかし、自分が神に背いていることを自分から認める者は禍である。まことに禍である。このような者は悔い改めて主イエス・キリストを信ずるのでなければ、どのようにしても救いを受けることができない。
モーサ3,13,主なる神はこれらのことをあらゆる血族、あらゆる国民、あらゆる国語の民に宣べ伝えさせるために、そ

の聖い予言者たちをよろずの民の中につかわしたまい、これによってキリストの降臨を信ずる者に罪の赦しを受けさせ、ちょうどキリストがもはや来りたもうて自分
モーサ3,13-1,間にましますように非常な喜びを以て楽しませようとなしたもうた。
モーサ3,14,しかし、主なる神はその民がかたくなであることを知って、民にモーセの律法を守ることを命じたもうた。
モーサ3,15,神はまたキリストの降臨に関する多くの前兆と不思議とひながたとを民に死摩したもうた。聖い予言者たちもまたキリストの降臨について民に宣べ伝えたが、民はその心をかたくなにして、キリストが自らの血を流して身代りの贖罪をなしたまわなかったなら、モーセの
モーサ3,15-1,何の役にも立たないことが解らなかった。
モーサ3,16,また仮りに幼児でさえも罪を犯すことができたとしても、キリストの身代りの贖罪がなければかれらは救われないことが解らなかった。しかし汝に告げる。幼児は祝福を受けている。見よ、幼児はアダムのためにすなわち生まれながらの性によって堕落をしていても、キ
モーサ3,16-1,キリストの血は幼児の罪を身代りとなって贖うのである。
モーサ3,17,更に汝によく言っておく。全能の主キリストの御名によるほかには世の人に救いを与えることのできる名も道も方法も一切ない。
モーサ3,18,見よ、キリストは裁判をなしたまい、その裁判は正義にかなっている。それであるから、まだ年の行かない中に死ぬ幼児は亡びないけれども、もしもおとながへりくだって幼顎のようになり、過去現在未来を通じて、救いは身代りの贖罪をなしたもう全能の主なるキリス
モーサ3,18-1,キリストの血に由って与えられることを信じなかったならば、その身も霊も救いを受けることができない。
モーサ3,19,肉欲に従う人は神の敵であって、アダムの堕落してこの方そうである。しかし、人がもし聖霊の導きに従い肉欲に従うことをすてて主キリストの身代りの贖罪に由って聖徒となり、幼児のように従順で柔和で謙遜で忍耐で愛情に富み、幼児がその父に従うように、主が負
モーサ3,19-1,主が負わせたもうすべてのことに喜んで服従しないならば、とこしえに神の敵となるであろう。
モーサ3,20,更にわれは汝に告げるあらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民およびあらゆる人々がひろく救主のことを知る時がくる。
モーサ3,21,見よ、その時になると悔い改めて主なる全能の神の御名を信ずるのでなければ幼児のほかに誰1人も神の御前に罪の無い者とされない。
モーサ3,22,今でさえも、汝が汝の神である主に命ぜられた事をその民に教える時、わが汝に話したこの道に従って行わないなら、かれらはもはや神の目には罪の無いものとされない。
モーサ3,23,さて、われはもはや主なる神に言えと命ぜられたことを言ってしまった。
モーサ3,24,また主は仰せになる"この言葉は裁判の日にこの民に対して明らかなる証詞となりこの証詞によりて民のあらゆる者はその行いの善し悪しに従い裁判を受くべし。
モーサ3,25,もしも民の行い悪しくば民は自分に罪あることと憎むべき行いあることとを覚りて苦しみを感ずる状態に置かる。この状態はかれらを主の前より退かしめ、2度と抜け出で難き永遠の責苦と悩みの有様に陥らしむ。ゆえにこの有様に陥りし者はすでにその身も霊も救われ
モーサ3,26,故に、かれらはまたすでに神の怒りの杯を飲みぬ。正義はこの怒りのかれらに降るを止むることを得ず。そは、アダムが禁断の実を食いしため堕落するの止むを得ざりしが如し。それ故に、憐みの力はいつまでもかれらの上に及ばず。
モーサ3,27,かれらの受ける責苦はあたかも焔を消すことを得ずとこしえに煙のあがる燃b艪髣ー黄の湖の苦しみにひとし"と。主はこのように言えとわれに宣うた。アーメン'"。
モーサ4,,モーサヤ書　第4章
モーサ4,*-*,ベンジャミン王の言葉終る。救いの条件。人間はみな神に依存していること。物を惜しまず、賢くして行いにはげめと言う戒め。
モーサ4,1,さて、ベンジャミン王は主の使いから伝えられた言葉を宣べ終って、民の群衆を見わたしたところ、ごらん、かれらは主をおそれる心を起して地に伏した。
モーサ4,2,かれらは、自分たちが肉の欲に支配されている有様をかえりみ、自分たちは土の塵よりも劣っていると思って、声をそろえて高く叫んで言った"ああ憐みたまえ、キリストの血による身代りの贖罪の効力を及ぼして、われらが各々その罪を赦されて心を清められるように
モーサ4,2-1,たまえ。われらは天地万物を造ってこの後人間に降臨したもう神の御子イエス・キリストを信じ奉る"と。
モーサ4,3,それから後、かれらはベンジャミン王が聞かせたように降臨したもうはずのイエス・キリストを不覚信じたので、もはやその罪の赦しを受けて良心が安らかになったから、主の"みたま"がかれらに降ってその心が喜びに満された。

モーサ4,4,それから、ベンジャミン王はまた口を開いてその民に話はじめた”私の友達、私の兄弟たち、私の血縁たちおよび私の民よ。私は、今これから私が話しかける残りの話をお前たちが聞いて心に悟るよう、お前たちの注意を再びよび起したい。
モーサ4,5,ごらん、お前たちが今もしも神の恵みを知り、自分が役立たずで何のねうちもない堕落した状態にあることを知り、
モーサ4,6,神の恵みと、ほかに比べるものもない神の権能と、智恵と、忍耐と、人につくしたもう辛抱強さとを知り、また主に頼ってその命令を勤勉に守り、現世の生涯の終りまでも信仰を保っている人に救いを受けさせるよう創世の前から用意してあるキリストの身代りの贖罪を
モーサ4,6-1,認めるようになるならば、
モーサ4,7,お前たちは、アダムが堕落してこのかたこの世に在った者、現在在る者、これから先世の終りまで在る者のために創世の前から用意してあるキリストの身代りの贖罪によって救いを受ける者である。
モーサ4,8,そもそも、この道によって救いが受けられる。すでに示したこの救いのほかには救いがなく、すでにお前たちに話し手おいた条件のほかに人が救われる条件はない。
モーサ4,9,神を信是世、神がましますことと、神が天地の間の万物を造りたもうたことと、天でも地でも全智全能であることとを信是世。また、人間は主の悟りたもうこととをことごとくは悟れないことを信ぜよ。
モーサ4,10,重ねて言う、お前たちはその罪を悔い改めその罪を捨てて神の前にへりくだらなくてはならないことを信じ、神がお前たちを赦したもうように真心から祈れ。もしもこれらをみな信ずるならば慎んで実行せよ。
モーサ4,11,私はすでに言ったけれども、今1度これをお前たちに言おう。お前たちがもしも神の栄光を知り、あるいは神の恵を知り、神の愛を味わい、自分の心をこれほどまでに喜ばせる罪の赦しを受けているならば、私はお前たちが常々神の偉大なことと、自分が役立たずで何の
モーサ4,11-1,何のねうちもないことと、恩を受けるねうちもない自分に神が恵み深く辛抱強くましますこととを忘れずに起して低くへりくだり、毎日毎日主の御名によって祈り、天使の口から示された将来のことを確く信じて変わらないことを望む。
モーサ4,12,もしもお前たちの行いがこのようであるならば、お前たちはいつも喜び、神の愛に浴し、いつも罪の赦しを保ち、お前たちを造りたもうたお方の栄光、またはすべて正しく真実であることをいよいよ深く知るようになる。
モーサ4,13,またお前たちは互に傷つけ合う心がなく、安らかに暮して、あらゆる人にその当然受けるはずのものを与えたいと思うようになる。
モーサ4,14,またお前たちは、自分の子供らを飢えさせたりはだかのまま置いたりはしないであろう。またお前たちは自分の子供らが神の律法に背き互いに争ったり戦ったりして、私たちの先祖が言った悪魔すなわちあらゆる義しさの敵であって罪の頭である悪魔に仕えることを許さ
モーサ4,15,お前たちは自分の子供らに真の道を行う事と真面目でなければならなぬ事と互に愛し互いに助けねばならぬ事とを教えるであろう。
モーサ4,16,またお前たちは、お前たちの助けが要る者を自分たちで助け、貧しい者に自分の持ち物を施し、物もらいがお前たちに乞いねがうのを拒んだり、これを追いはらって死なせるようなことをしないであろう。
モーサ4,17,おそらくお前たちは’この者は自分自身でこのみじめな有様を招いたのであるから、私はかれを助けるのを止め、その苦しみを救うために私の食物を与えず、また私の持ち物も分けてやらない。その苦しみは当然の罰であるからである’と言うであろうが、
モーサ4,18,私はお前たちに告げる。このようなことをする者は誰でも大いに悔い改める必要がある。もしもその行いを悔い改めないならば、お前たちはとこしえに亡びて神の王国の民となることはできない。
モーサ4,19,ごらん、私たちはみな物もらいではないか。みな神と言う同じお方に依り頼んで、食も衣服も金銀もあらゆる宝も一切の持物を受けているではないか。
モーサ4,20,今もお前たちは神の御名を四で罪の赦しを願っている。神はお前たちの願いをきき入れずに、これをむだな願いにしたもうたことがあるか。いや、神はその”みたま”をお前たちの上に注ぎ、喜びをお前たちの心に満し、喜びがきわまって言うところを知らないほどにお
モーサ4,20-1,口をふさぎたもうた。
モーサ4,21,さて、もしもお前たちを造りお前たちの命や持物や才能を与えたもう神が、お前たちが必ず受けると信じて固い信仰で乞い求めるあらゆる義しいものを与えたもうならば、ましてお前たちは自分の持物を与えるのが当然ではないか。
モーサ4,22,死をまねかれるためにお前たちの持物を分けてくれと願う者を、もしもお前たちが判断してこれを罪ありとするならば、お前たちが持物をおしがって与えないからお前たちに罪があるとすることこそもっと義しいではないか。お前たちの持物はお前たちの物ではなく神の
モーサ4,22-1,お前たちの命もまた神のものである。それであるのに汝らは神に祈願をせず、また汝らの財産をおし

がって施さなかった罪を悔い改めない。
モーサ4,23,私はお前たちに告げる。その人は禍である。その財産はからだと共に亡びるからである。私はこれらのことを浮世の物に富んでいる人々に告げる。
モーサ4,24,次に私は貧しい人たちに告げる。物がのこるほど持たなくとも、日々の用にことを書かないほど物を持ちながら、自分がのこりを持たないからと言って物もたいに与えることをことわる人々よ。お前たちは心の中で'物がないから施さないが、もしもあったら施したであ
モーサ4,24-1,と言うと思う。
モーサ4,25,さてもしこのようなことを心の中だけで言うならば罪に当たらないが、もしそうでなければそれは罪に当る。お前たちはまだ得ていないものを貪るから、それが罪に定められることは当然である。
モーサ4,26,ねがわくは、私がお前たちに話をしたように日々自分の罪の赦しを保ち、罪無しに神の前を歩くことができるように、お前たちが1人1人みなその財産の多く少いに応じてそれを貧しい人々に分け与えることを望む。それはたとえば、腹のすいている者に食物を与え、は
モーサ4,26-1,者に着物を着せ、病んでんる者を見舞い、各々の必要に従って肉体についても霊についても救助を施すことである。
モーサ4,27,お前たちは注意してすべてこれらのことが賢く秩序義しく行われるようにせよ。人がその力以上のことをするのはぜひ必要ではない。しかし、褒美を得るために努め励むのは必要なことである。従って、なにごとも秩序義しく行わなくてはならない。
モーサ4,28,お前たちは誰でも隣の人から物を借りたなら、約束した通りにそれを返すことを忘れないようにしてほしい。そうでないと、自分が罪を犯すばかりでなく、隣の人にもまたおそらく罪を犯させるであろう。
モーサ4,29,終りにのぞんで、私は罪を犯す手段をみなあげてお前たちに話すことはできない。罪を犯す手段方法はいろいろあって数えつくすことができないほど大井からである。
モーサ4,30,しかし、これだけは言えると言うのは、もしもお前たちが自分自身と自分の思想と自分の言葉と行いに注意をせず、神の命令を守らず、私たちの主が降臨したもうことについて聞いていることを生涯の終りまで信じないならばお前たちは必ず亡びると言うことである。そ
モーサ4,30-1,それであるから世の人々よ、記憶をせよ、亡びるな"。
モーサ5,,モーサヤ書　第5章
モーサ5,*-*,ベンジャミン王の言った言葉の効果。民は悔改めをしてキリストと誓約を結び、キリストの民と呼ばれる。
モーサ5,1,さて、ベンジャミン王は以上のように話し終ってから、民がはたして自分の言葉を信ずるかどうかを知りたいと思って使いを民の中につかわした。
モーサ5,2,すると民は口をそろえて言った"まったく、われらは王の言われた言葉をみな信じ、またその言葉が確に真実であることを知っている。それはわれらの心を非常に改めさせ、悪を行う性質をなくして常に善を行う望を与えたもうた全能の主の"みたま"に由るのである。
モーサ5,3,そして、われらの自身もまた神の限り無い恵みとその"みたま"が与えたもう啓示とに由って将来のことを明らかに見通し、必要あらば何ごたについても予言をすることができるであろう。
モーサ5,4,われらをこれほどまでに喜ばす大きな知識を与えたのは、王の言われたことを信ずるわれらの信仰である。
モーサ5,5,われらは残る生涯の中、神のみこころに従ってその命令をしたもう一切のことを守ると喜んで神と誓約をする。これは、天使が仰せになったような果てしない責苦を招かないため、また神の錨のさかずきから飲まないようにするためである"。
モーサ5,6,これはベンジャミン王がその民の言うのを待ち望んでいた言葉であった。それであるから、ベンジャミン王は民に向って言った"お前たちはすでに私の望んでいた言葉を言った。またお前たちの結んだ誓約は義しい誓約である。
モーサ5,7,お前たちの結んだ誓約のためにお前たちはキリストの子と呼ばれ、キリストの息子や娘と呼ばれる。それは今日キリストがお前たちの精神を新に生みたもうたからである。お前たちはキリストの御名を信ずるから自分の心が改まったと言う。お前たちはキリストにより生
モーサ5,7-1,息子や娘となった。
モーサ5,8,お前たちはキリストと言う頭の下にあって自由を得た。このほかにはどこにもお前たちを自由にすることのできる貸したはなく、救いを与える名前はない。それであるから、私は生涯の終りまで従順でなくてはならない誓約を神と結んだお前たちが喜んでキリストの御名
モーサ5,8-1,受けるように望む。
モーサ5,9,どのような名で呼ばれるか知っているであろう。それはかれがキリストの御名で呼ばれるからである。

モーサ5,10,また誰でもみな喜んでキリストの御名を引き受けない者は、ほかの名で呼ばれる。従って、かれは神の左に居るのである。
モーサ5,11,私はお前たちが、キリストの御名はすなわち私がお前たちに与えると言った名前であることを忘れないように望む。罪悪を犯すのでなければ決してこの名前は消されるはずがないから、お前たちは罪を犯してその心からこの名前が消されないように用心をせよ。
モーサ5,12,また私はお前たちが神の左に居らず。お前たちを招きたもう声とお前たちを呼びたもう名前とを聞いてこれを知るように、いつもこの名前を心にしるして忘れないように望む。
モーサ5,13,人はどうしてまだ仕えたこともなく、見も知らず思いもかけない主人を知ることができようか。
モーサ5,14,人はまた隣の人のろばを自分の所へつれてきてこれを飼うか。いやいや、人はそのろばが自分の所の群れと一しょに草を食うことさえさせないで追いはらうに違いない。お前たちに言うが、もしも自分たちが何と呼ばれるかを知らないならば同じことであろう。
モーサ5,15,それであるから、私の願うのは、主なる全能の神キリストがお前たちを自分のものと証印をなしたまい、お前たちが天にあげられ、天地の間の万物を造りよろずのものに優れてその上にまします神の智恵と能力と正義と憐みとによって、永遠の救いと永遠の生命とを得る
モーサ5,15-1,お前たちが確く信じて動かずいつも多くの善い行いをするようにと言うことである。アーメン”。
モーサ6,,モーサヤ書　第6章
モーサ6,*-*,民の名を書き記す。妻子を任命する。モーサヤ王の統治はじまる。ベンジャミン王死ぬ。
モーサ6,1,さてベンジャミン王は、その民に話し終ってから、神の命令を守ると神に誓約をした者たちの名をみな書き記す必要があると思った。
モーサ6,2,そこで、民は幼児を除いて1人のこらず誓約をしてキリストの皆を喜んで受けた。
モーサ6,3,ベンジャミン王はこれらのことをしてしまってから、その息子のモーサヤを聖めて民の支配staであり王である者とし、自分の王国の政事を一切モーサヤにゆだね、また民が神の命令を聞いて知り自分らがした誓約を思い起こさせるために、民に教える妻子たちを任命
モーサ6,3-1,それから民の群を解散させたので、民は1人のこらず家族毎にまとまって各々の家へ帰った。
モーサ6,4,モーサヤは父のあとをついでその国を治めはじめた。モーサヤが統治をはじめたのはかれが30歳の時であったから、リーハイがエルサレムを去ってからおよそ476年後のことになる。
モーサ6,5,ベンジャミン王はその後3年生きながらえて亡くなった。
モーサ6,6,2-内容? モーサヤ王は主の道を歩み、神の裁決と法令とを守り、また神に命ぜられたすべての命令をよく守った。
モーサ6,7,モーサヤ王は、その民に土地を耕させたばかりでなく、自身もまた工作をした。これは自分がその民のわずらいとならず、またよろずのことを父の行ったように自分もするためであった。よって、その民の中には3年の間争いが少しもなかった。
モーサ7,,モーサヤ書　第7章
モーサ7,*-*,リーハイ・ニーファイの地を探検する。アンモンとリムハイ王。リーハイ・ニーファイの民、レーマン人の奴隷となる。
モーサ7,1,さて、モーサヤ王は3年の間引きつずき平和を保ってから、さきにリーハイ・ニーファイの地もしくはリーハイ・ニーファイ市に住もうとして国を出た人たちの消息を知りたいと思った。それは、その人々がゼラヘムラの地を出てから、モーサヤ網の民に何の音沙汰もな
モーサ7,1-1,ので、民が王にうるさく訴えて王をわずらわしたからである。
モーサ7,2,それで、モーサヤはその同胞たちの消息をたずねるため民の中の強い者16人にリーハイ・ニーファイの地へ行くことを許した。
モーサ7,3,そこでそのあくる日この16人の人々はリーハイ・ニーファイの地へ行こうと出発したが、ゼラヘムラの子孫デアンモンと言う強くて勢いのある人が1行の頭となって一しょに行った。
モーサ7,4,しかし、これらの人々はリーハイ・ニーファイの地へ行くことにどの道を通って荒野を旅市手よいか知らなかったので、40日も荒野の中をさまよった。
モーサ7,5,40日の間荒野をさまよって、とうとうこの人々はシャイロムの来に当る1つの古山に到着し、ここに天幕を張った。
モーサ7,6,そして、アンモンはアマレカイ、ヒーレム、ヘム、と言う3人の兄弟をつれてニーファイの地へ下って行ったところ、
モーサ7,7,ニーファイの地とシャイロムの地とに住む民の王に逢い、王の護衛兵にとりかこまれて捕えられ、縛られて牢の中へ投げこまれた。
モーサ7,8,かれらは牢屋に2日置かれてから王の前につれて行かれ、縄めを解かれて王の前に立ち、王の問いた

ずねることに答えるのを許された。実は尋問に答えよと言われたのである。
モーサ7,9,そこで王はかれらに当手”見よ、われはリムハイと言ってノアの子である。ノアはゼニフの子であったが、ゼニフはその先祖の土地であるこの地に住もうとし、ゼラヘムラの土地を出てこの土地を出てこの土地へ来りこの民の投票によって王となった。
モーサ7,10,さて、われが護衛の兵と共に門の外に居たとき汝らはいかなるわけがあってこの都の城壁に近よることをあえてしたか。
モーサ7,11,われはこのことを汝らに問いたずねるために汝らを生かしておいたのである。さもなければわれは護衛の兵に殺させてしまったであろう。さて、汝らに答える事を許す”と言った。
モーサ7,12,アンモンは答えることを許されたと知ると、すぐに進み出て王の前に伏し、再び立ち上って次のように答えた。王よ、今日私がまだ生きていて王に答えるのを許されたことを私は不覚神に感謝する。私はできるだけ思いきって答えるが、
モーサ7,13,もしも、王が私を誰だか知っていたなら、あのように私を縄目にかけなかったであろう。それは、私は名をアンモンと言ってゼラヘムラの子孫である。私はゼニフがゼラヘムラの地からつれてきたはらからの消息を知ろうとしてゼラヘムラからきたと。
モーサ7,14,リムハイ王はアンモンの言葉を聞くと非常に喜んで言った”それで、われは確にゼラヘムラの地に居た同胞がまだ生きていることがわかった。今われは嬉しく思う。明日はわが民もまた喜ばそう。
モーサ7,15,見よ、われらは今レーマン人の奴隷となって堪え難い税をかけられている。しかしながら、見よ、われらの同胞は今われらを奴隷の境涯とレーマン人の手から救い出すであろう。そうしたら、われらは喜んでその同胞の奴隷になろう。レーマン人の王にみつぎを納めるよ
モーサ7,15-1,むしとニーファイ人の奴隷になる方がよい”と。
モーサ7,16,そこでリムハイ王は、アンモンもその兄弟たちも、もう縛ってはならぬとその護衛の兵に言い、またアンモンとその1行の者が飲み食いをして旅の疲れを休めるように護衛の兵をシャイロムの来に当る古山に行かせ、アンモンの同行者たちを都につれてこさせた。1行の
モーサ7,16-1,者たちはすでにいろいろ難儀な目に逢い、飢えや渇きや疲れに苦しんでいた。
モーサ7,17,そのあくる日、王は全国の民に布告を廻し、この布告を見たら神殿に見たら神殿に集って王の告げる言葉を聞けと命じた。
モーサ7,18,これに従って民が集ると、リムハイに次のように言った”われ民よ、頭をあげて心に慰めを得よ。見よわれらがもはや敵に服従しない時節は間近である。ずっとさきのことばではない。われらのした多くの努力は、すでに空しくなったけれども、これから先は骨折り甲斐
モーサ7,18-1,甲斐のある努力が実を結ぶ希望がある。
モーサ7,19,それであるから、頭をあげて喜び、神を信じてこれにすがれ。神はすなわちアブラハム、イサク、ヤコブの神であってイスラエル人をエジプトの国から導き出し、乾いた土地を踏んで紅海を渡らせ、荒野では死なないようにマナを食わせ、そのほかかれらのために多くの
モーサ7,19-1,為したもうた。
モーサ7,20,見よ、これと同じ神はわれらの先祖をエルサレムの地から導き、今日になるまでその民を養いをの民を守りたもうたが、見よ、われらは自分たちの犯した罪悪と憎むべき行いの結果、今この奴隷の境涯に落ちている。
モーサ7,21,この民の王となったゼニフは、その先祖の国に住もうと言う望が強すぎたのき、レーマン王のずる賢い悪だくみにかかり、レーマン王はゼニフ王と条約を結んでその国の1部であるリーハイ・ニーファイ市、シャイロム市およびそのまわりの地をゆずってこれを所有させ
モーサ7,22,ところが、こうしたのは全くこの民を征服し、またはこの民を奴隷にするためだけであったから、見よ、今われらはみつぎとしてとうきびと大麦といろいろな穀物の半分、および家畜の増加分の半分をレーマン人の王におさめている。レーマン人の王は、真にあらゆるわ
モーサ7,22-1,われらの持物の半分をきびしく取り立て、これを出さなければわれらを殺す。以上は今日お前たちが目撃　事実である。
モーサ7,23,ああ、これは堪え難いことではないか。われらの受けているこの艱難はまことに甚しいではないか。われらは当然大いにこれを憂い悲しむべきではないか。
モーサ7,24,お前たちに告げる。まことにわれらの憂い悲しまなくてはならない理由が大いにある。見よ、すでに殺された兄弟たちがいかに多いことか、その血は空しく流された、これはみな罪悪の結果である。
モーサ7,25,この民がもしも罪悪に陥らなかったならば、主はこの大きな災難がかれらにふりかかることを許したまわなかったであろう。ところが、かれらは主の言葉に聞き従わないで、互いに血を流すほどの争いを自分らの間に起した。
モーサ7,26,そればかりでなく、かれらは主の予言者である1人の人を殺した。これは神が選びたもうた人であって、

民にその罪悪と憎むべき行いを戒め、将来起る多くの事やキリストの降臨までも予言をした。
モーサ7,27,その予言者は、キリストが万物の父である神であることと、後に人の形を受けたもうことと、その形は人がはじめに造られた形と同じであって、人はすなわち神の形に象って造られたことと。神は人間の中に降臨し血肉を受けて世界の上に居りたもうはずであることとを
モーサ7,28,そう言ったから、民はこの予言者を殺し、そのほかに神の怒りを自分たちに招く多くのことをした。それであるから、誰もこの民が奴隷になってひどい艱難をして苦しむことを不思議に思う者はない。
モーサ7,29,見よ、主は仰せになった。'われはわが民の罪を犯すときにこれを助けず、かれらの栄えぬようにその道を塞ぐ。その行いはかれらの前につまずく石の如くとならん'と。
モーサ7,30,また仰せになった'もしわが民汚れを蒔かば、かれらはつむじ風の中にその殻を取り入るべし。しかしてその結果は毒なり'と。
モーサ7,31,まら仰せになった'もしわが民汚れを蒔かば、速なる滅亡を生ずる東風を招くべし'と。
モーサ7,32,見よ、今主の誓いが成就してお前たちは打たれて苦しんでいる。
モーサ7,33,しかしながら、お前たちが誠心から主に立ち帰り、主に頼って熱心に仕えるならば、主はみこころのままにお前たちを奴隷の境涯から救い出したもう"。
モーサ8,,モーサヤ書　第8章
モーサ8,*-*,アンモン、文字を刻んだ24枚の金版が発見されたことを知る。アンモン、この金版を予言者にして聖見者であるモーサヤ王に依託することを提案する。
モーサ8,1,リムハイ王はまことに多くのことをその民に話して聞かせたが、私はただその少しだけをこの書に記した。王は以上のことを話し手聞かせた後、ゼラヘムラの地に住む兄弟たちのことをくわしく民に聞かせ、
モーサ8,2,さてアンモンを群衆の前に立たせて、ゼニフがゼラヘムラを去った時から、アンモンがゼラヘムラを出た時になるまで、その兄弟たちの中に起ったいろいろのことを物語らせた。
モーサ8,3,アンモンは、リムハイ王の民にベンジャミン王が最后に教えた言葉も宣べ伝え、またベンジャミン王の言った一切の言葉を解り易く説明した。
モーサ8,4,リムハイ王は、以上のことがすっかり終ってから群衆を解散させて1人のこらずその家へ帰した。
モーサ8,5,さて、王はその民がゼラヘムラの地を出て以来の民の歴史をのせている版を、アンモンに読ませるためその前へ持ってこさせた。
モーサ8,6,アンモンがその歴史を読んでしまうと、王はアンモンにお前は外国の言葉を訳することができるかと問いたずねたところ、アンモンはできない由を王に答えた。
モーサ8,7,そこで王はアンモンに言った"私は民が艱難をするのを見て悲しく思い、民の中から43人の者たちを荒野の中へ旅をさせた。それは、これによってこの者たちがゼラヘムラの地を発見し、われわれを奴隷の境涯から救い出してくれと兄弟たちに願うこともできるかと思
モーサ8,7-1,である。
モーサ8,8,こうして43人の者たちは長い間荒野の中をさまよい、力をつくして捜したけれども、とうとうゼラヘムラの地を見つけずにここへ戻ってきた。これらの者は旅の間に多くの湖や河がある国を通り、人間や獣などの骨が1ぱい散らばっており、またあらゆる種類の建物の
モーサ8,8-1,1ぱいのこっている国を見つけた。これは前にイスラエルの万群ほどに多勢の民が住んでいた跡である。
モーサ8,9,これらの者は、自分たちの話が偽でないことを証明するために、文字が1ぱい刻んである24枚の版を持って帰ってきたがその版は純銀でできていた。
モーサ8,10,また数枚の大きな胸当も1しょに持ってきたが、それらは真鍮と銅でできていて全然疵のないものであった。
モーサ8,11,またそのほかに剣も何本か持ってきたが、これはその柄が腐ってしまって、刃は錆で腐触していた。ところが、その金版に刻んである言葉を訳する力のある者は1人もこの国にない。それで私は汝に訳することができるかと聞いたのである。
モーサ8,12,私はもう1度聞くが、汝は訳のできる人を知っているか。私はこの言葉をわが国の言葉に訳してもらいたい。この記録を残して亡びた国民の残存者のこと、または亡びた当の国民のことなどが、多分この版によって解るかも知れない。私はその国民が亡びたわけを知りた
モーサ8,12-1,思うのである"と。
モーサ8,13,アンモンはこれに答えて、王よ、私はこの記録を訳することのできる人w確に教えてさし上げる。その人はあるものを持っていて、これで見ればどんな昔の記録でも訳することができる。これは神から授けられた賜であって解訳器と言う。神の命令を受けた人のほかには
モーサ8,13-1,1人もそれを覗いて見ることはできない。見てはならないものを詮索してそれがために亡びるおそれ

があるからである。およそ、これを覗いて見よと命ぜられる人を聖見者と言う。
モーサ8,14,実にゼラヘムラの地に住む民の王は、この命を受けた人であってこの貴い賜物を神から授かっている。ということを言った。
モーサ8,15,すると王は"聖見者は予言者よりも偉大である"と言った。
モーサ8,16,アンモンは答えて、聖見者とは啓示者であってまた予言者でもある。誰も神の全能を受けなければこれより大きな賜物を受けることができないが、誰も神の全能を受ける者はない。しかし、人は大きな能力を神から授かることがある。
モーサ8,17,聖見者は過去のことも将来のことも知ることができる。聖見者によってよろずのことが示される。すなわち、秘密は明らかにされ、隠れたことは公然となり、知られていないことは知られるようになる。聖見者によってこれらが知られるのであって聖見者でなければ知ら
モーサ8,18,このように、神は人が信仰によって偉大な奇跡を行うことができるように、その方法をそなえて置きたもうたので、人はそのはらからに大きな利益を与えるようになるのである。ということを言った。
モーサ8,19,さて、アンモンがこれらのことを言い終ると、王は非常に喜んで神に感謝していった"この版には疑いもなく大きな奥義がのっている。従ってあの解訳器とは、このような一切の奥義を世の人々にあらわすために備えてあるのである。
モーサ8,20,ああ、主の御業の驚嘆すべきことよ、その民のために永く堪え忍びたもうことよ。人の智恵はいかに暗くて鈍感なことか。世の人は智恵を得ようとせず、また智恵の支配を受けたいとも思わない。
モーサ8,21,まことに、世の人は羊飼から逃げて散り、森の猛獣に追われて食われる野性の羊の群れと同じである"と。
モーサ9,*-*,ゼニフの記録・・・その民がゼラヘムラの地を去って後、レーマン人の手から救出された時に至るまでの記録。第9章から第22章に至る。
モーサ9,,モーサヤ書　第9章
モーサ9,*-*,ゼニフ、リーハイ・ニーファイの地を所有するために行く。レーマン人中の間者。レーマン王のずるいこと。
モーサ9,1,私ゼニフは、ニーファイ人の言葉を完全に教わり、また私たちの先祖が最初に住んだ所有の地であるニーファイの地のことを知っていたから、私は間者としてレーマン人の中につかわされた。これはレーマン人の軍勢の様子を探り出し、わが群が襲ってこれを亡ぼすため
モーサ9,1-1,しかし、私はレーマン人の中で善い事が行われているのを見て、レーマン人が亡びないように願った。
モーサ9,2,それであるから、私は荒野で味方の者と争論をし、私たちの支配者にレーマン人と条約を結んでもらいたいと言った。ところが、私たちの支配者は血を流すことを好む情け容赦のない男であったから、私を殺せと命令した。しかし、私は多くの血を流す争闘の結果生命を
モーサ9,2-1,この争いで父と戦い兄弟は兄弟と戦ってわが軍の多数はついに荒野の中で死んだが、助かった私たちはゼラヘムラの地に帰って、死んだ者の妻や子にこのことを物語った。
モーサ9,3,それでも、私は全ぞの地に住みたいと言う望が強すぎたので、先祖の地へ言ってその地を所有したいと思う人々を皆集め、その地を指してまた荒野の中へ旅立った。しかし、私たちの主なる神をなかなか思い起こさなかったので、飢饉とひどい艱難に逢って苦しんだ。
モーサ9,4,それにもかかわらず、私たちは長い間荒野をさまよった末、さきに兄弟たちが殺された場所に天幕を張った。ここに私たちの先祖の地に近い所であった。
モーサ9,5,私は王の性質を知るためと、私の味方をつれてその国へ入りおだやかに土地を所有することができるかどうかを知るために、仲間の中4人の男をつれ、その都市へ言って、王の居る所へ入って行った。
モーサ9,6,私が王の居る所へ入って行ったところ、王は私にリーハイ・ニーファイの地と所有してもよいと誓約をし、
モーサ9,7,その地に住んでいる民に出て行けと命じたから、私と私の民とはこの地に住まうために入った。
モーサ9,8,そこで私たちは家屋の建築とリーハイ・ニーファイ市およびシャイロム市の城壁の修繕に着手し、
モーサ9,9,土地を耕してとうきび、小麦、大麦、ニーズ、シウムおよびあらゆる果実の種子を蒔き始め、それから私たちの人口はようやく増加してこの地に栄えるようになった。
モーサ9,10,さて、レーマン王がこの地をゆずって私たちにもたせたのは、私の民を奴隷にしようと言うわるがしこいずるさからであった。
モーサ9,11,それであるから、私たちが12年の間この地に住んでから、レーマン王は私の民が何かしてその国に勢力を得て強い者となり、レーマン王の民がこれにうち勝って奴隷にするなどとてもできないようになるかと恐れるようになった。
モーサ9,12,レーマン人は怠けもので邪神を礼拝する民であったから、私たちの労働によって腹を肥し、私たちの牧場の家畜の肉を食って飽くためにと思った。

モーサ9,13,そこで、レーマン王はその民を煽動して私の民と戦をさせたから、戦と不和がこの地に起り始めた。
モーサ9,14,私がニーファイの地を治めた第13年に、私の民がシャイロムの地のはるか南でその家畜の群に水を飲ませ草を食べさせ、また土地を耕していた時、レーマン人の大軍が襲いかかってわが民を殺し、その家畜と畑のとうきびを取って行き始めた。
モーサ9,15,そこで、敵に追いつかれなかった者たちは皆ニーファイ市へ逃げてきて私に保護を求めた。
モーサ9,16,それで私は弓、矢、剣、太刀、棒、石投器そのほか考えつくことのできるあらゆる武器をこれに持たせ、レーマン人と戦うために一しょに出陣をした。
モーサ9,17,私たちは主の能力にたよりレーマン人と戦うために進んで行った。私と私の民は先祖の救われたことを思い出し、主に祈りを捧げて私たちを敵の手から救い出したもうよう切に願ったからである。
モーサ9,18,ところで、神は私たちの祈りにこたえ願いを聞きとどけたもうたから、私たちは神の能力によって煤m、レーマン人を撃って1昼夜に3043人を殺した。私たちは実に敵を自分の地から追い払ってしまうまでこれを殺したのである。
モーサ9,19,そして、私も自分の手で敵の死者を葬ることを助けたけれども、私たちにとって非常に悲しく悼ましい限りであったのは私の味方が279人殺されたことである。
モーサ10,,モーサヤ書　第10章
モーサ10,*-*,レーマン王死ぬ。ゼニフとその民圧制者にうち勝つ。
モーサ10,1,私たちは国を恢復して再びその地に住むことになった。私はレーマン人がまたやってきて私の民に戦をいどまない先に私の民に持たせようとして、あらゆる武器を造らせた。
モーサ10,2,また私は、レーマン人がまた不意に襲ってきて私たちを亡ぼさないように、国のまわりに見張りの兵を起き、そして私の民と家畜の群を守って敵の手に落ちないようにした。
モーサ10,3,このようにして私たちは22年の間、先祖の土地に住んだ。
モーサ10,4,私は男には土地を耕させてあらゆる穀物やあらゆる果物を作らせ、
モーサ10,5,女には糸を取らせ、骨折り働かせ、あらゆる良いリンネルを織らせ、また私たちのはだかを覆うためにあらゆる織物を織らせた。このようにして、私たちはこの土地で栄え22年の間ずっと平和がつずいた。
モーサ10,6,さて、レーマン王が亡くなってその息子が王の位をついで国を治めることになったが、かれはその民を扇動して私の民に敵対をさせたから、レーマン人は戦の備えをし出陣して私の民を移準備に取りかかった。
モーサ10,7,しかし、私の民が不意を打たれて亡びないように、私は敵の準備を探り知ってこれを防ぐために前以てシェムロンの地のまわりに間者をつかわしておいた。
モーサ10,8,ついにレーマン人は多数の芸をつれてシャイルムの地の北の方に現れたが、その兵士は各々、弓、矢剣、太刀、投石、石投器などを持ち頭をそり赤裸で腰に皮の帯をまとっていた。
モーサ10,9,私は民の中の女子供を荒野の中にかくれさせ、武器を使うことのできる者は年老いた者も若い者も皆レーマン人と戦う準備のために集め、それぞれの年齢に従って列につかせた。
モーサ10,10,このようにして私たちはレーマン人と戦うために出陣し、私も年老いていたけれどもまた戦に出た。私たちは本当に主の能力によって戦に出たのである。
モーサ10,11,レーマン人は主についても主の能力についても知っていなかったから自分の力だけを頼みにした。しかし、人の力について言えば実際強い民であった。
モーサ10,12,レーマン人は野蛮猛悪であって血を見ることを好、その先祖の伝説を信じていた。その信じている伝説とは、かれらは遠い先祖の犯した罪悪のためにエルサレムの血から追い出されたが、荒野に居たころ兄弟たちから虐待を受けた。また大海を渡る時にも虐待をされた。
モーサ10,13,それから後始めて住んだ土地に居た多岐にもまたひどい扱いを受けたと言うのである。実は、これらは全くニーファイが兄弟たちよりも忠実に主の誡命を守ったからで、主にはニーファイの祈りを聞き届けたまい、ニーファイは主の恵みを受けて荒野の旅でかれらを導い
モーサ10,14,ところが、兄弟たちは主の計いを知らずにニーファイに向って腹を立て、また海を渡ったときにも主に対してその心をかたくなにしてニーファイを怒り、
モーサ10,15,約束の地に着いてからも、民を支配する権能を自分たちから取ったと言って、ニーファイのことを怒りニーファイを殺そうとした。
モーサ10,16,またニーファイが主の命令に従いその住所を去って荒野へ言ったとき、真鍮版に刻んだ記録を携えて行ったから、かれらはまたニーファイに腹を立ててニーファイはその記録をかれらから奪ったと言った。
モーサ10,17,このようにして、レーマン人はニーファイ人を憎み、ニーファイ人を殺してその持物を奪い取り、ニーファイ人を亡ぼすために全力をつくさなくてはならないと子孫に教えた。それであるから、レーマン人はニーファイの子孫に対して尽きぬ恨みをもっているのである。
モーサ10,18,こう言うわけで、レーマン王はそのずるさと偽りの計りごとと本当らしい約束で以て私をだまし、私の民

を亡ぼそうとして、私にこの民を当地へつれてこさせた。それで、私たちはこのように長年の間この土地で苦しんでいる。
モーサ10,19,私ゼニフはレーマン人についてこれらのことを皆私の民に話した後、主を信頼して力をつくして戦に行けと民をはげました。それで私たちはレーマン人と相対して戦い、
モーサ10,20,ついにレーマン人を再び私の国から追いはらい、勘定をしなかったくらい多くの敵を殺した。
モーサ10,21,それから私たちは自分の土地へ帰り、私の民もまたその家畜の群を飼いその畑を耕しはじめた。
モーサ10,22,私はもはや年をとったから、王の位を私の息子の1人にゆずった。従って、もう言うことはない。願わくは、主が私の民を祝福したまわんことを、アーメン。
モーサ11,,モーサヤ書　第11章
モーサ11,*-*,悪王ノアとその祭司たち。予言者アビナダイ、世にはびこる罪悪を非難する。ノア王、アビナダイを殺そうとする。
モーサ11,1,ゼニフが王の位をその息子のノアは父の後をうけて民を治めはじめたけれども、かれは父の守った道をふみ行わなかった。
モーサ11,2,ごらん、ノアは神の命令を守らずに、自分の欲をほしいままにして多くの妻を持ちまた多くの側女を蓄え、その民にもまた罪を犯させて主の前に憎く見えることを行わせたから、人民はみだらな行いをしあらゆる罪悪を行った。
モーサ11,3,ノアは金、銀、ゼフ、銅、真鍮、鉄、肥えた家畜、穀物など、および民の持物には皆各々5分の1の税をかけ、
モーサ11,4,この税をみな自分自身と自分の妻妾と祭司とその妻妾とを養う用に供した。このようにノアは国の政事を変えてしまった。
モーサ11,5,かれはまた父が立てて置いた祭司たちをのこらずやめて、高慢な心が盛んな新しい祭司たちを立てたが、
モーサ11,6,この新しい祭司たちは怠け者であって邪心を拝しみだらな行いをしながら、ノア王がその民から取り立てる税で養われた。このように、民の痛ましい骨折りによって得た財産を費やして盛んに罪悪が行われた。
モーサ11,7,民もまた王や祭司たちの根もないへつらいの言葉にだまされたから、邪心を礼拝するようになった。まことに、王や祭司たちは甘い言葉をかけて人民にへつらったのである。
モーサ11,8,ノア王は、広大で風雅な建物を多く建て、これを美しい木細工、またはきん、金、銀、鉄、真鍮、zrfu、銅などで造ったあらゆる貴い物で飾り、
モーサ11,9,また自分のために広い宮殿を建ててその中に玉座を設けたが、これを皆良い材木で造り金や銀や貴い物で飾った。
モーサ11,10,ノア王はまた職人たちに良い木や銅、真鍮で以て神殿の壁の撃ち側にあらゆる立派な細工をさせ、
モーサ11,11,得に大祭司たちが用いるために、ほかのすべての席よりも高くした席を純金で飾り、大祭司たちが偽りの言葉と空説とを民に述べるとき、その身体と腕とをかけて安楽にさせるためにその席の前に1つの大を造らせた。
モーサ11,12,また神殿の近くに1つの塔を建てたが、それは非常に高い塔であって、王がその植えに立てばシャイロムの地一帯とレーマン人のもっているシャムロンの地一帯とその附近の地一帯とを見わせるほど高かった。
モーサ11,13,このほか王はシャイロムの地にも多くの建物を建てさせ、またシャイロムの地の北にかつてニーファイの地を立ちのいた時に集る所とした小山があるが、その上に1つの大き亜塔を建てさせた。ノア王は民に税をかけて取り上げた財貨でこのようなことを行った。
モーサ11,14,また王は自分の財貨に心を用い、自分の妻や妾、と共にしたい放題な生活を送った。王の祭司たちもまた浮れ女にたわむれて日を暮した。
モーサ11,15,王はまた国中の所々に葡萄園を造り、葡萄のしぼり場を建てて葡萄酒を製造した。それであるから、王もその民もみな一しょに酒のみになってしまった。
モーサ11,16,そこでレーマン人ハ、ノアの民が小数で畑に出ている時、または家畜の群を飼っている時など折々急に襲いかかって殺すようになった。
モーサ11,17,それでノア王はレーマン人を防ぐために護衛の兵士を全国の周囲につかわしたが、それは十分な数でなかったのでレーマン人は襲いかかってこの兵士も殺し、その家畜の群をたくさん国の外へ追いやった。このようにレーマン人はノア王の民を亡ぼし、その恨みをはらし
モーサ11,18,しかし、ノア王は軍隊を送ってレーマン人と戦わせこれを追いかえした。ノア王の軍は1時レーマン人を追いかえしたから、分捕物をとったことを喜びながら帰ってきた。
モーサ11,19,さて、この大勝利を得たから、かれらはいよいよ高慢になり自分の力を自慢して"われの50人はよくレーマン人の何千人にも当る"と言い、このように大きなことを言って血を見ることを好み、兄弟たちの血を流すのを

喜んだ。これは、王や祭司たちの罪悪の結果起っ
モーサ11,19-1,起ったことである。
モーサ11,20,さて、ノア王の民の中にアビナダイと言う男があったが、民の間に出て行き予言をしはじめて次のように言った"見よ、主はこのように私に命じたもうた'行きてこの民に伝えよ。主は言う、この民は禍なり、われその憎むべき行いと罪悪とみだらなる行いとを見たれば
モーサ11,20-1,かれらもし悔い改めずば、われはわが怒りをかれらに下すべし。
モーサ11,21,かれらもし悔改めをせずその神なる主に立ち帰らずば、われはかれらをその敵の手に落すべし。しからば、かれらは奴隷にされて敵に責められん。
モーサ11,22,かれらはわれがその主なる神にして、わが民の罪悪を裁くねたむ神なることを知るに至らん。
モーサ11,23,この民悔い改めずしてその主なる神に立ち帰らずば、奴隷とせらるべし。その時主なる全能の神にあらずばこれを救う者なからん。
モーサ11,24,かれらわれに嘆願する時、われは速にこれを聞かずかえってその敵に撃たれしむべし。
モーサ11,25,かれら粗き布をまとい身に灰をあびるほどに悔い改め、大いにその主なる神に祈り願わずば、われはその願いを聞き届けずその艱難の境涯よりこれを救い出さざるべし'と、このように主は仰せになり、このように伝えよと私に命じたもうた"。
モーサ11,26,さて、アビナダイはこのように民に告げたから、民はアビナダイを怒ってこれを殺そうとした。しかし、主はアビナダイを民の手から救い出したもうた。
モーサ11,27,ノア王もまたアビナダイが民に告げた言葉を聞いて同じように怒り"われもわが民もかれから裁判されねばならぬとは、アビナダイとは一体何者であるか、またこのように大きな艱難をわが民に下す主とは何者であるか。
モーサ11,28,われがアビナダイを殺すからアビナダイをここに引いてこい。かれはわが民を扇動して互いに怒らせ、また民の間に不和をひき起こそうとしてこれらのことを告げた。この故にわれはアビナダイを殺してやる"と言った。
モーサ11,29,さて、人民はその目が暗んでいたから、心をかたくなにしてアビナダイの言ったことを受け入れず、それから後はアビナダイを捕えようとした。またノア王もその心をかたくなにして主の言葉にさからい、その悪い行いを悔い改めなかった。
モーサ12,,モーサヤ書　第12章
モーサ12,*-*,悪事を行う者を非難したためにアビナダイ投獄される。偽の祭司たちアビナダイ裁判する。偽の祭司たちアビナダイに言い破られる。
モーサ12,1,2年たってから、アビナダイが姿を換えてまた民の間に現れたところ、民がそれをアビナダイであるとは知らなかったのでかれは民に予言して言った"主は私に命じて言いたもう'アビナダイよ、行ってわが民であるこの民に予言せよ。かれらは、その心をかたくなにし
モーサ12,1-1,わが言葉にそむき、いまだその悪しき行いを悔い改めず。よりては怒りをかれらに及ぼし、かれらが罪悪と憎むべき行いをなす所にわが烈しき怒りを下さんとす。
モーサ12,2,この時代の人々はまことに禍なり'と。主はまた私に仰せになった'汝の手を伸し予言して言え。主は言いたもう、この時代の人々はその罪のために奴隷にされ、頬をうたれ、人に追われて殺され、空を飛ぶ猛鳥と犬と猛獣その肉を食うべし。
モーサ12,3,ノア王の命は、熱き炉の中にある衣と同じく人に惜まるることなからん。かれはわれを主なりと知るべし。
モーサ12,4,われは飢饉、疫病などの恐ろしき禍をもてわが民なるこの民を責め苦しめ、たえずかれらを泣きわめかせん。
モーサ12,5,われは堪え難き重荷をその背に負わせ、かれらは物言えぬろぼの如くに追い使わるべし、
モーサ12,6,われはまたかれらの上に雹を降らせかれらにひどく打ち当たらしめん。また東風かれらを打ち、虫かれらの地を荒らしてその穀物を食わん。
モーサ12,7,また大いなる疫病に打ち悩まさるべし。これらは皆民が罪悪を犯し憎むべきことをなしたるためにわれが行うところなり。
モーサ12,8,民悔い改めずばわれは民を世界の面よりことごとく亡ぼし去るべし。されど、かれらその歴史をあとにのこしてそれを後世この地に住む民に示すようわれはそれを保存すべきも、そはこの民の憎むべき行いをほかの民に知らしめんためなり'"と。アビナダイはこのほか
モーサ12,8-1,この民について多くの禍を予言した。
モーサ12,9,ここに於て民はアビナダイを怒り、これを捕えてしばり上げ王の前へ引いて行って次のように王に言った。見よ、われわれは王の民について不吉な予言をして、神が民を亡ぼすと言った者を今ここに引いてきた。
モーサ12,10,この者はまた王の命についても不吉なことを予言して、王の命は炉の火の中にある衣と同じようになると言い、

モーサ12,11,また王は1本の草の茎である、獣の足でふみにじられる野の枯草の茎と同じようになると言った。
モーサ12,12,またかれは、王はあざみの花と同じようになるであろう、あざみの花が満開の時に風が吹くならば、すぐと地面に吹き散らされるのだと言い、これを主の言葉であると偽って言った。また王がもし悔い改めないならば、王の悪い行いのためにこれらのことがみな確に起る
モーサ12,13,さて王よ、王がどのように大きな悪事をなし、王の民がどのように大きな罪を犯したからわれわれは神から罪の宣告を受け、またはこの男から裁判を受けなくてはならないのか。
モーサ12,14,王よ、われわれは罪がない。また王よ、あなたもこれまで罪を犯したことはない。それであるから、この男は王について偽を言い、ありもしないことを予言したのである。
モーサ12,15,われわれは強いのでこの先奴隷になることも敵に捕らえられることもない。そして王はこれまでこの土地で栄えておられ、また幾久しく栄えつのである。
モーサ12,16,われわれは、その男を捕えてきた。これを王の手にわたすから、随意に処分なさるようにと。
モーサ12,17,そこでノア王はアビナダイを牢屋の中へ入れ、その処分方法を祭司たちと協議するために祭司たちに集まれと命じた。
モーサ12,18,祭司たちは王に言った"アビナダイを尋問するために、かれをここへ連れてこさせたまえ"と。王はアビナダイをここへ引いてこいと命を下した。
モーサ12,19,そこで祭司たちは、アビナダイに前后不そろいの事を言わせてかれを訴える口実にしようとじん問にとりかかった。しかしアビナダイは勇ましく弁じて祭司たちが非常に驚くほどことごとくそのじん問に答えた。アビナダイは実に問われることを一々弁明し一言一句みな
モーサ12,19-1,祭司たちを閉口させたのである。
モーサ12,20,この時、祭司の中の1人がアビナダイに問うて"われらが先祖から教わっているところの誌してる言葉の意味は何であるか。
モーサ12,21,その言葉には'良き音ずれをもたらし、平和を布き、善の良き音ずれをもたらし、救いを宣べひろめ、シオンに向いて、汝の神治めたもうと告ぐる者の足は山の上にいと美しきかな。
モーサ12,22,主がシオンを回復したもうときに、汝の番人らは心を1つみし、声をそろえて高らかに唱わん。
モーサ12,23,エルサレムの荒れすたれたる所よ。主はその民を慰めエルサレムを購いてこれを回復したまいし故喜びて共に唱え。
モーサ12,24,主はその聖き能力を万国の民の眼に現したまいたれば、世界の隅々の人々までことごとくわれらの神の与えたもう救いを見るべし'とある"と言った。
モーサ12,25,そこでアビナダイは答えて言った"あなたらは祭司であってこの民に教え、予言の道を悟と言いながら、なお私にたずねてこの予言のこころを知りたいと言うのである。
モーサ12,26,私はあなたらに言う。あなたらは主の道を曲げているから禍である。あなたらは、たとえ呼べんを悟っていてもこれを民に教えなかったから、従って主の道を曲げているのである。
モーサ12,27,あなたらは心を注いで知識を得なかったから賢くなかったのである。それで、あなたらはこの民に何を教えていなさるか"。
モーサ12,28,祭司たちは答えて言った"われわれはモーセの律法を教えている"と。
モーサ12,29,そこでアビナダイは再び言った"もしもあなたらがモーセの律法を教えているならば、なせそれを守らないのか。なぜあなたらは財産に執着をするのか。なぜみだらな行いをし、浮れ女にらわむれて勢力を費すのか。なぜ主が私をつかわしてこの民に下る大きな災を予言
モーサ12,29-1,予言させたもう必要があるまでこの民に罪悪を犯させるのか。
モーサ12,30,あなたらは私が本当のことを言っているのを知らないのか。あなたらは私が本当のことを言っているのを知っている。だから当然神の御前にふるえおののかなくてはならない。
モーサ12,31,あなたらはモーセの律法を教えていると言ったから、自分の罪悪のために打ち悩まされるであろう。あなたらはモーセについて何を知っているか。モーセの律法によって救われるものか、あなたらはどう思う"と。
モーサ12,32,ところが祭司たちは答えて言った"モーセの律法によって本当に救われる"と。
モーサ12,33,しかしアビナダイは祭司たちに言った"もしあなたらが神の命令を守るならば救われるであろう。すなわち主がシナイの山でモーセに告げて、
モーサ12,34,'われは汝をエジプトの国から導き出し、奴隷となりし家より救い出したる汝の主なる神なり。
モーサ12,35,汝はわれのほかに何物をも神とすべからず。
モーサ12,36,己がため何の偶像をも造るべからず。上は天にあり下は地にある何物にてもその形に象りて偶像を造るべからず'と言いたもうた命令を守るならば救われる。これは私が知っている"と。
モーサ12,37,そしてアビナダイはなお祭司たちに"あなたらはこれまでに全部これを守って行っているか。いやいや、行ってはいない。あなたらはこの民にこれらのことを守れと教えているか。いやいや、教えてはいないのである"

と言った。
モーサ13,,モーサヤ書　第13章
モーサ13,*-*,予言者アビナダイ、神の力に守られて祭司たの攻撃に堪え律法と福音とを引いて語る。
モーサ13,1,さてノア王はアビナダイの言葉を聞いて祭司たちに"こいつを追い払って殺してしまえ。こいつは気違いだ、われらと何のかかわりがあるか"と言った。
モーサ13,2,そこで祭司らが立ってアビナダイを捕えようとしたが、アビナダイは祭司らを防いで言った。
モーサ13,3,私にさわるな。もし私に手をかけるならば神が必ずあなたらをうち破りらもうであろう。私は主が私をつかわして伝えさせようと思いたもうた氏名をまだ果していない。またあなたらが私に説明をせよと言ったこともまだ説明していない。それで、神は私が亡びるのを許
モーサ13,3-1,たまわないのである。
モーサ13,4,私は神から受けた命令を行わなくてはならない。しかし、私があなたらに本当のことを言ったので、あなたらは私に腹を立て、また私が神の言葉を告げたのであなたらは私を気違いだと思った"と。
モーサ13,5,さてアビナダイがこう言った後にもノア王の民は思い切ってアビナダイを捕えなかった。それは主の"みたま"がアビナダイに満ちて、ちょうどモーセがシナイの山で主と直接話をした時のようにアビナダイの顔がまばゆく輝いていたからである。
モーサ13,6,アビナダイは神から受けた権能と威勢とをもって語りつずけた。
モーサ13,7,"あなたらは私を殺す力がないことを自分で知っている。それで私は自分の氏名を今伝えてしまおう。私は、私があなたらの罪悪について本当のことを言うのであなたらの心が切られるように痛むことを知り、
モーサ13,8,また私の言葉があなたらの胸に怪しみと驚きと錨とを満すことを知っている。
モーサ13,9,しかし、私は自分の氏名を果そう。それから私が救われるならば自分の行末については何の心がかりもないのである。
モーサ13,10,私はただこれからあなたらが私に大してすることが、将来起ることを示すものとなり手本となるということを言っておく。
モーサ13,11,私は神の誡命があなたらの心に記されていないことを認め、あなたらが一生の大半を悪事を習って教えるに費したことを知っているから、今あなたらに神の誡命の残りを読み聞かせてあげる。
モーサ13,12,あなたらは私が前に言ったことをおぼえているだろう。すなわち'己がため何の偶像をも造るべからず、上は天にあり下は地にあり地の下は水の中にある何物にてもその形に象りて偶像を造るべからず'と。
モーサ13,13,私はまたそのつずきを読んで聞かそう'汝またその前にひれ伏すべからず、これに仕うべからず、何となれば主にして汝の神なるわれはねたむ神にしてわれを憎む者の3、4代後の子孫にまでその父祖の罪を報い、
モーサ13,14,われを愛してわが命令を守る者には幾千万人までも恵を施すべかればなり。
モーサ13,15,汝は徒らに汝の神なる主の名を口にすべからず。主は徒らにその名を口にする者を罪なしとせざればなり。
モーサ13,16,安息日を大切に憶えて聖日とせよ。
モーサ13,17,6日の間働きて、為すべき一切の業をなすべし。
モーサ13,18,18日目すなわち汝の神なる主の安息日には何の業をもなすばからず。汝も汝の息子、娘、僕、婢、家畜そのほか汝の問内にある外来人も皆然り。
モーサ13,19,そは、主6日の間に天地と海とその中なる万物とを造り、安息日を祝してこれを神聖としたまいたればなり。
モーサ13,20,汝の神なる主が汝にたまいし地に永く生きながらえ得んがため、汝の父母を敬え。
モーサ13,21,汝殺すべからず。
モーサ13,22,汝姦淫すべからず。汝盗むべからず。
モーサ13,23,汝その隣人につき偽りの証を立つべからず。
モーサ13,24,汝その隣人の家、妻、僕、婢、牛、ろばそのほか隣人のいかなる物をも貪るべからず'"と。
モーサ13,25,アビナダイはこのように読み終ってまた祭司たに言った"あなたらは、この民にこれらの命令をみなよく守りこれらの言をみなよく行うように教えたか。
モーサ13,26,いやいや、あなたらは教えなかった。もしあなたらは教えなかった。もしあなたらがこれを教えたならば、主は私をつかわしてこの民について不吉な予言をさせたまわなかったであろう。
モーサ13,27,さて、あなたらはモーセの律法によって救われると言った。今私は言う。あなたらはまだモーセの律法を守る必要がある。しかし、よく言っておく、将来もはやモーセの律法を守る必要がない時がくる。
モーサ13,28,さらに、律法だけで救われるのではなくて、もしも神御自身がその民の罪悪を贖うためになしたもう身代りの贖罪がないならば、たとえモーセの律法があっても世の人は亡びるほかはないのである。
モーサ13,29,イスラエルの子孫はかたくなな民であって罪を犯すことが早く、その主なる神を思うのがおそかったの

で、とくにきびしい律法をかれらに与える必要があった。
モーサ13,30,それであるから、かれらには常平生神と神の御前で行ねばならぬ努めとをおぼえさせるため、日々堅く守らねばならぬ儀式典礼の多い律法が与えられた。
モーサ13,31,しかし、ごらん、これらの式はみな将来起ることに応じてあらかじめこれを示すものであった。
モーサ13,32,さて、イスラエル人はこの律法をよく理解していたか。いやいや、かれらはその心がからくなであったから律法を理解しない者も居た。なぜならば、神が与えたもう贖いによらなければ誰も救われることができないのを悟らなかったからである。
モーサ13,33,ごらん、モーセはメシヤが降臨したもうことを、また神がその民を贖いたもうことをイスラエル人に予言したではないか。世界が始まってからこのかたの予言者たちも皆そうしたではないか。この予言者たちは皆多少なりともこれらの事について話したではないか。
モーサ13,34,この予言者たちは、神が親しく世の人々の中に降臨して人の形を受け、大きな能力をもって世界の面を歩きたもうことと、
モーサ13,35,神が死者の復活を来し、また自ら悩まされ責められたもうことを告げたではないか”。
モーサ14,,モーサヤ書　第14章
モーサ14,*-*,アビナダイ、ノア王の祭司たちにイザヤの言葉を引いて語る。イザヤ書第53章と比較せよ。
モーサ14,1,まことにイザヤも次のように予言したではないか”誰がわれらの告げることを信じたか。主の能力は誰に現われるか。
モーサ14,2,かれは柔かい苗木のように、また乾いた土から出る株のように主の御前にそだつ。かれは美しい形もなくまた美しい色もない。だからこれを見るとき人のしたい寄るうるわしさがない。
モーサ14,3,かれは人にいやしみ捨てられ、悲哀の人であって悲しみの味を知る。われらはまた自分の顔をかれから隠すかのようにふるまう。かれが憎まれたときにかれを貴ばなかった。
モーサ14,4,かれはまことにわれらの悩みを負いわれらの悲しみをになった。ところがわれらはこれを見てかれは悩まされ神にうたれて苦しめられると思った。
モーサ14,5,しかしかれはわれらのとがのため傷を負い、われらの罪悪のために打たれたばかりでなく、またわれらの代りにこらしめを受けてわれらに安心を与えた。われらはかれが打たれるによって癒されるのである。
モーサ14,6,われらは皆羊のように迷って各々心のままに道を歩くけれども、主はわれらの悪事をことごとく贖う責をかれに負わせたもうた。
モーサ14,7,かれはしいたげられ、苦しめられたが何事も口にせず、子羊のようにほふり場に引いて行かれたが、羊がその毛を切る者の前に黙っているように何事も口にしなかった。
モーサ14,8,かれは牢屋と法定から引いて行かれたが、生ある者の地から絶たれた。誰がその代を承け継ぐ者であるか。かれはわが民のとがのために打たれた。
モーサ14,9,かれは死ぬ時罪ある者と共にその墓を設けたが、また富んだ者と共に墓を設けた。それは1つの悪も行わず1つの偽りも口にしなかったからである。
モーサ14,10,しかしながら、かれを打つことは主のみこころに適った。主はかれを悩したもうた。かれ自身を汝が罪祭の供物にしたもうとき、かれはその子孫を見ることができ、その年は永くて主のみこころはかれによって栄える。
モーサ14,11,かれは自分自身のわずらいを見て満足に思う。わが義しい僕は多くの人のつみを負うて、自分の知識によってその人々を義しいとする。
モーサ14,12,それであるから、われはかれに偉大な者たちと共にその分け前を取らせよう。かれは強い者と共に獲物をわけ取る。これはかれがかれ自身をいけにえとし、罪人の中に数えられ、多くの人の罪を負い、罪のある人たちのためにとりなしをしたからである。
モーサ15,,モーサヤ書　第15章
モーサ15,*-*,アビナダイの予言。神親しく降臨してその民を贖いたもう。キリストが父にして子なりと呼ばれたもう所以。
モーサ15,1,さて、アビナダイはなおかれらに言った”私は、あなたらに悟ってほしいことがある。すなわち、神は親しく世の人の中に降臨してその民を購いたもう。
モーサ15,2,そしてこの神は肉体に宿りたもうから神の御子と呼ばれたもう。またその肉体を父のみこころに従わせたもうから、父にしてまた子である。
モーサ15,3,神の力で体内に宿りたもうたから父であり、肉体を持ちたもうから子である。このように父にもなり、また子にも成りたもう。
モーサ15,4,よって父と子とは1つの神会を成したまい、かれらはまことに天地の真の永遠の父である。
モーサ15,5,このように肉は”みたま”に従う、すなわち子は父に従って1つの神会を成し、誘惑に逢ってもこれに負けず、自分の民が侮り打ち追い出し拒むままに任せたもう。

モーサ15,6,この神は世の人々の間に多くの大きな奇跡を行いたもうてから、ちょうどイザヤが'羊がその毛を切る者の前に黙っているように何事も口にしなかった'と予言をしたように引いてゆかれ、
モーサ15,7,十字架にかけられたもう。そして子の心が全く父の心に従ったのであるから、その肉体を死にさえも従わせたもう。
モーサ15,8,このように、神はすでに死にうち勝って死の縄目をたち切り、御子に世の人のためとりなしをする権能を与えたもう。
モーサ15,9,それは御子が天に昇り、憐みの心をもち、人間をいつくしむ愛情に富み、人と正義との間に立ち、死の縄目をたち切り、ひとの罪悪と罪とがとを負い、人を贖い、正義の要求を満足させたもうからである。
モーサ15,10,さて、あなたらに言うが、御子の世を受け伝える者は誰であるか。ごらん、あなたたちに言うが、御子がすでに身も霊も罪祭に供えたもう時にその後裔をごらんになるであろう。しかし誰が御子の後裔になるだろうか、あなたらはどう思うか。
モーサ15,11,ごらん、私はあなたらに答えよう。主が降臨なしたもうことを予言したすべての聖い予言者の言葉に聞き従い、主がその民を贖い救いたもうことを信じ、贖い救われる時に自分の罪が許されることを信じて待ち望む者は、みな御子の後裔であって神の王国を嗣ぐ者になる
モーサ15,12,なぜならば、御子が人の罪を負い、人を罪とがから贖うために死にたもうのはこれらの人のためであるからである。それで、かれらは御子の後裔ではないか。
モーサ15,13,およそ口を開いて予言をし、罪に陥らなかった者であって、世界が始まって以来起った聖い予言者もみなまた御子の後裔ではないか。まったく、かれらはみな御子の後裔である。
モーサ15,14,かれらは平和を布き善の良い音ずれをもたらし、救いを宣べひろめ、シオンに汝の神は治めたもうと告げた者たちである。
モーサ15,15,それであるから、その足は山の上にあっていかにも美しいではないか。
モーサ15,16,今現に平和を布く者たちの足も山の上にあっていかにも美しいではないか。
モーサ15,17,また今から後とこしえに平和を布く者たちの足も山の上にあっていかにも美しいであろう。
モーサ15,18,ごらん、こればかりではない。良い音ずれをもたらして平和を起し、その民を贖いその民を救いたもう主の御足は山の上にあっていかにも美しいではないか。
モーサ15,19,主がその民のためになしたもうた創世の前から定まっているキリストの身代りの贖罪がなかったならば、まことにそれがなかったならば、人はみな永遠に亡びるほかはない。
モーサ15,20,しかしごらん、死の縄目は断ち切られ、御子は君臨して死者を司どる権能を持ちたもう。従って御子は死者を復活させたもう。
モーサ15,21,それであるから復活が起る。これはすなわち第1の復活であって過去の人と現在の人とキリストの復活がある時までの将来の人との復活である。キリストとは御子のことを言う。
モーサ15,22,さてすべての予言者とその予言を信じ神の命令を守ったすべての人々は第1の復活の時によみがえる。そのよみがえるのはすなわち第1の復活である。
モーサ15,23,これらの人々はよみがえって、自分を贖いたもうた神と共に住むことができる。このようにして、これらの人々は死の縄目を断ち切りたもうたキリストによって永遠の生命を得るのである。
モーサ15,24,また救いの道を教えられなかったからその道を知らずにキリストが降臨したもう前に死んだ者も第1の復活にあずかる。主はかような者にも復活を与えたもう。これらの人は主に贖われて第1の復活を受ける。
モーサ15,25,また幼児も永遠の生命を受ける。
モーサ15,26,しかしごらん、あなたらは神の御前に恐れおののかなくてはならない。主は、主に逆らって罪を改めないままに死ぬような者たちを贖いたまわない。それであるから、あなたらは当然恐れおののかなくてはならない。世の始めからこのかた、わざと神にそむき、神の命令
モーサ15,26-1,私利ながらこれを守らず、罪のあるままに死ぬ者は第1の復活にあずかることができない。
モーサ15,27,それであるから、あなたらは当然恐れおののかなくてはならない。なぜならば、あなたらのような者は救われないからである。主はこのような者を贖いたまわないばかりか、このような者を贖いたもうことができない。それは自分自身矛盾することをなしたもうことはで
モーサ15,27-1,また正義の当然な要求を拒みたもうことはできないからである。
モーサ15,28,私はあなたらに言う。主の賜である救いをあらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、およびあらゆる人々に宣べ伝える時がくる。
モーサ15,29,主世、汝シオン復活したもう時、汝の番人たちは心をひとつにし、声をそろえて高らかに歌う。
モーサ15,30,エルサレムの荒れすたれた所世、主がその民を慰め、エルサレムを購ってこれを復活したもうたから喜んで共に歌え。
モーサ15,31,主はその聖い力を万国の民の眼に現わしたもうから、世界の隅々に至る人々までことごとく私たちの

神が与えたもう救いを見るのである”と。
モーサ16,,モーサヤ書　第16章
モーサ16,*-*,アビナダイ、その予言をつずける。キリストは唯一の贖い主。復活と裁判。
モーサ16,1,このように言い終ってから、アビナダイはその手を聴衆へ伸して、また次のように言った”よろずの民が主の与えたもう救いを見る時と、あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、あらゆる人々が心を1つにして神の裁判は正しいと神の御前に告白する時がくる
モーサ16,2,その時悪人は主の御言葉に聞きし違っていなかったから、追い出されて泣き叫び涙を流しなげき悲しみ歯がみをするであろう。
モーサ16,3,かれらは肉欲におぼれその心がきわめて悪く、悪魔がかれらを司どるから主が贖いたまわない。この悪魔は私たちの最初の両親を誘惑した昔の蛇であって、それが誘惑したために私たちの最初の両親は堕落し、その堕落したためにすべての人類は肉のことを思い肉欲に耽
モーサ16,3-1,その個々とがきわめて歩く善悪を区別する力があって甘んじて 悪魔に従うようになった。
モーサ16,4,すべての人類はこのように堕落して神の御前から追い出されたが、ごらん、もしも堕落して神の御前から追い出されている境涯からその民を神が贖いたまわないならば、かれらはとこしえにその境涯にとどまるのである。
モーサ16,5,しかし、あなたらは、たえず自分の肉欲をほしいままにし罪悪の道と神に背く道とを進む者は、その堕落した境涯にとどまって悪魔がかれを司どる力をみな以ていることを忘れてはならない。このような者は神の仇であって、まだ購われたことがなかったと同じ有様にい
モーサ16,5-1,悪魔もまた神の仇である。
モーサ16,6,さて、将来起ることが今すでに起っているように話すと、もしもキリストがこの世に降臨したまわないから贖われることは決してない。
モーサ16,7,もしもキリストが墓の勝利を奪い死の苦痛をなくするために、死者の中からよみがえりたまわないならば、または死の縄目を断ち切りたまわないならば復活は決してない。
モーサ16,8,しかしながら、確に復活があるから墓は勝つことができず、死の苦痛はキリストによって除かれる。
モーサ16,9,キリストは世の光であって世の生命である。まことにその光はとこしえであっていつまでも薄らぐはずがなく、その生命は限りなくてまたと死ぬはずがない
モーサ16,10,この死んでなくなる身は不死不滅となり、この朽ちるはずの身は朽ちないものとなり、後にその身でなした行いの善悪に応じて裁判を受けるために神の法定に召されるのである。
モーサ16,11,この時、その行いが良ければ復活してから限りない生命と幸福とを受け、その行いが悪ければ復活してから永遠に神の前から断ち切られる罰を受ける。永遠に神の前から断ち切られるとは、その人が服従した悪魔の所に引きわたされることである。
モーサ16,12,この罰を受ける者は、肉の欲をほしいままにし、主が憐み深い手を自分に伸べておりたもう時主に祈り求めたことのない者である。主の憐み深い手は本当にかれらに向けられたけれども、かれらはこの御手にたよることをせず、その罪悪を戒められたがそれを止めず、悔
モーサ16,12-1,悔い改めよと言われたけれども悔改めをしなかった。
モーサ16,13,さて、あなたらは当然自分らの罪悪を恐れおののいて悔い改め、キリストのほかには誰もたよりにして救いを受ける方がないことを忘れてはならないではないか。
モーサ16,14,あなたらがもしモーセの律法を教えるならば、その律法が将来の事に応じて予めこれを示すものであることも教えよ。
モーサ16,15,また贖いが真の永遠の父である主キリストによって受けられることも民に教えよ。アーメン”と。
モーサ17,,モーサヤ書　第17章
モーサ17,*-*,アビナダイの殉職。火あぶりにされている間に、アビナダイ自分の殉教に対する応報のあることを予言する。アルマの改宗。
モーサ17,1,さて、アビナダイがこのように言ってしまうと、ノア王は祭司たちにかれを捕えて殺させよと命じた。
モーサ17,2,ところが祭司たの中にニーファイの子孫でアルマと言う年若い男があった。かれはアビナダイが祭司らに向って証をした罪悪が本当の言であるのを知ってその言葉を信じたから王に向って、アビナダイを怒らずにかれを放って安らかに出て行かせてくれと乞いねがった。
モーサ17,3,しかし、王はいよいよ起ってその場からアビナダイを追い出させ、その上かれを殺すために僕たちにあとを追わせた。
モーサ17,4,ところが、アルマはこの追手から逃げて姿を隠したから僕たちはその行方を失った。そしてアルマはしばらくの間隠れていたが、その間にアビナダイが言った言葉をのこらず書き誌した。
モーサ17,5,王はその番兵にアビナダイをかこんで捕えさせたもで、番兵はアビナダイをしばって牢屋の中に入れ

た。
モーサ17,6,それから3日たって王はその祭司たちと相談をした後、またアビナダイを王の前に引き出させてかれに言った。
モーサ17,7,”アビナダイ。汝の罪状すでに明らかであるから死刑に処する。
モーサ17,8,汝は神が親しく世の人の所に降臨すると言ったから、もしわれとわが民とについて言った不吉なことをのこらずとり消さないならば、汝はかならず殺されるのである”。
モーサ17,9,アビナダイはそこで王に答えて言った”王に申し上げる。私がこの民について王に申し上げたことは真実であるから、私は決して取り消さない。私はその言葉が確であることを王に知らせようとして、甘んじて王の手に落ちたのである。
モーサ17,10,私は死に至るまで耐え忍び、決して私の言ったころを取り消さない。私の言葉は王を責める証となるであろう。王がもし私を殺すならば、これは罪のない者の血を長洲のであるから、また終りの日になって王を責める証となるであろう”と。
モーサ17,11,ここに於て、ノア王はアビナダイの言葉を恐れ、神の罰を受けるか知れぬと思ってまさにアビナダイを放免しようとした。
モーサ17,12,ところが、差異sたちは声をあげてアビナダイを訴え”こやつは王をののしった”と言ったので、王は再びアビナダイを怒って氏名を言いわたした。
モーサ17,13,そこで、祭司らはアビナダイを捕えてしばり、薪を燃やしてその肌を焼き苦しめ、火あぶりにして殺した。
モーサ17,14,さて、炎があがってアビナダイを焼始めるとき、アビナダイはかれらに裂けんで言った。
モーサ17,15,”見よ、今汝らが私にしたように、汝らの子孫もまた多くの人に火あぶりの苦しみを与えるにちがいない。この火あぶりに逢う人々はその神である主の与えたもう救いを信ずるからである。
モーサ17,16,また汝らは罪悪のためもろもろの病にかかり、
モーサ17,17,4面から打たれ、野生の羊が猛獣に終われるようにあちこちに散り乱れるであろう。
モーサ17,18,その日に汝らは狩りとられて敵の手に落ち、今わが苦しむ通り火あぶりの苦しみを受けるにちがいない。
モーサ17,19,神はこのようにその民を亡ぼす者にあだを報いたもう。神よ、わが霊を受けたまえ”と。
モーサ17,20,このように言ってしまうと、アビナダイは火あぶりにされて死んだ。アビナダイが殺されたのは、神の命令をいやと言わなかったからであって、この殉職によってかれは自分の言葉が真理であることを証印したのである。
モーサ18,,モーサヤ書　第18章
モーサ18,*-*,モルモンの泉。アルマがヒーラムそのほかの者たちにバプテスマを施すこと。キリストの教会。ノア王が、アルマかれに従う者たちを亡ぼそうとして軍隊をつかわす。
モーサ18,1,さて、ノア王の僕の手から逃れたアルマは自分の罪と行いとを悔い改め、ひそかに民の間を経めぐってアビナダイの言った言葉を教え始めたが、
モーサ18,2,それはこれがら起ることと、死者の復活と、キリストの能力と苦しみと死と復活と昇天とによって起る人間の贖いに関することなどであった。
モーサ18,3,アルマは自分の言葉を聞こうとする者にみな教えを与えた。教えることが王の知るところとならぬよう秘密に教えを施したが、アルマの言葉を信ずる者が多かった。
モーサ18,4,そしてアルマの教えを信ずる者はみなモルモンと言う所へ言った。これはノア王が名をつけた所で国境にあり時節によっては野の獣が一ぱいにいた。
モーサ18,5,さて、モルモンには清らかな泉があり、アルマはここへ逃げて隠れていた。これは、この泉のからわらに小さい木の茂った森があり、アルマは昼の間この中に身を忍ばせて王の捜索からのがれていたからである。
モーサ18,6,アルマを信ずる人はみなアルマの言葉を聞こうとしてそこへやってきた。
モーサ18,7,しばらくたって、アルマの言葉を聞こうとして多くの人々、すなわちアルマの言葉を信じた人がみなモルモンに集ってきたが、アルマはこれらの人々に教えを施し、悔改めと贖いと主を信ずる信仰とを宣べ伝えた。
モーサ18,8,そこでアルマは言った”ごらん、ここにモルモンの泉がある(ここの泉をこのように言う)。あなたたちは神の羊の群に入って神の民と言われること、互いに苦難を軽くするために喜んで助け合うこと、
モーサ18,9,悲しむ者を思いやって共に悲しむこと、慰めが要る者を慰めること、また神に贖われ第1の復活にあずかる者の数に入って永遠の生命を得るよう、いついかなる時でも、どのような所に居ても、どんなことについても、死に至るまでも神の証し人になりたいと心から思っ
モーサ18,10,従って、あなたたちがもしも真心からこれを望んでいるならば、あなたたちは主からますます豊にその”みたま”を賜わるよう、主に仕えてその命令を守ると言う誓約を主に立てた証拠として、主の御名によってバプテス

マを受けるのに何のさしつかえがあろうか"と。
モーサ18,11,集った民はこの言葉を聞いて非常に喜び、その手を叩いて"これはわれわれが真心から願うことである"と言った。
モーサ18,12,このときアルマは先に立ってきた者の中のヒーラムと言う1人の男をつれて行って水の中に立ち、高らかな声で祈って言った"主よ、汝のしもべが聖い心を以てこの働きを為し得るよう"みたま"を与えたまえ"と。
モーサ18,13,こう行って祈ると主の"みたま"がアルマの上に降った。そこでアルマは"ヒーラムよわれは全能の神より権能を受けたるにより、汝がすでに肉体の死ぬまで全能の神に仕えたてまつると誓約をしたる証拠として汝にバプテスマを施す。ねがわくば、主の"みたま"汝の
モーサ18,13-1,また全能の神が創世の前より備えたもうたキリストの身代りの贖いによりて汝に永遠の生命をたまわらんことを"と言った。
モーサ18,14,この言葉が終ってからアルマとヒーラムとの2人は水の中に沈められ、再び起きて疵の中から出ると、もう"みたま"に満たされて喜びながら陸に上った。
モーサ18,15,アルマはまた別の1人をつれてまた水の中に下り前の者と同じくこれにもバプテスマを施した。しかし、このたびは自身は水の中に沈まなかった。
モーサ18,16,このようにしてアルマはモルモンに集ったすべての者にバプテスマを施したが、その数はすべてで204人であった。まことにこれらの人々はみなモルモンの泉でバプテスマを受け、充分に神の恵みを受けた。
モーサ18,17,これから後、これらの人々を1つにして神の教会ともキリストの教会とも言ったが、誰でも神の威力と権能とによってバプテスマを受けた者はこのキリストの教会に加えられた。
モーサ18,18,さてアルマは神から権能を授かったので祭司を選び按手礼によって任命したが、くわしく言うと50人ごたに1人の祭司を置き、この差異sに按手礼を授けて各々その司どる50人に教えを説き神の王国にかかわることを教えるよう任命をした。
モーサ18,19,またアルマは、自分が教えたことと、聖い予言者らが言ったことのほかは何ごとも教えてはならないとこの祭司たちに命じた。
モーサ18,20,すなわち、悔い改めねばならないことと、その民を贖いたもうた主を信じなくてはならないことのほかは何ごとも教えてはならないと命じた。
モーサ18,21,またおたがいに争うことなく、心をひとつにして望、同一の信仰を保ち、同一のバプテスマを受け、相愛し相一致してその心を結ばなくてはならないと祭司たちに命じた。
モーサ18,22,アルマはこのように祭司らに教えを説けと命じ、すべての者は右の教えを守って神の子となった。
モーサ18,23,さてアルマはまたかれらに安息日を守って聖日とすること、毎日自分らの神である主に感謝をすること。
モーサ18,24,またアルマがすでに按手礼によって祭司に任じた者たちは、みな暮しを立てるために自分で働かなくてはならないことを命じ、
モーサ18,25,また毎週聖徒たちのために道を教えその神である主を礼拝するために集る1日を特に定め、またほかの日にもできるだけしばしば集ることも定めた。
モーサ18,26,そして祭司らは暮しを立てるために聖徒らの扶持を仰ぐはずのものではなくて、その働きの報いには神の恵みを受けるはずであると定められた。これは祭司らが"みたま"を得て強くなり、これによって神を知る知識を得るためであって、また神からまわる威力と権能
モーサ18,26-1,教えさせるためであった。
モーサ18,27,アルマはまた、教会の聖徒らがみな各々その持物の多少に応じてその幾分を施すように命じた。たとえば、豊かに持つ人は豊かに施し、少しばかり持つ人は少しばかり施して何にも持たない人に与えると言ったようなことである。
モーサ18,28,しかし、このように人に施す財産の幾分は、神の御前に善いことを行いたいと言う心で自分の自由意志から施さなくてはならない。そして、困っている祭司たち、貧しい人々、はだかでいる人などに施さなくてはならなかった。
モーサ18,29,アルマはすでに神の命を受けていたので、このようにかれらに命じたのであった。それでかれらは神の御前に正しく行い、それぞれの欠乏と要用とに応じて肉体についても霊についても互に助け合った。
モーサ18,30,これはみなモルモンと言う所のモルモンの泉に近い森にあったことである。モルモンと言う所と、盛るものの泉と、モルモンの森とはそこへきて自分らの贖い主を知るようになった人々の目にはいかにも美しい所である。またこれらの人々は、とこしえにその贖い主を讃
モーサ18,30-1,歌うからいかにも幸福である。
モーサ18,31,これらのことは、ノア王に知らないように国境で行われた。
モーサ18,32,しかしごらん、ノア王は民の間にこのことがあるのを私利、しもべたちをつかわして民の動きを見張ら

せた。それであるから、ある日聖徒らが主の道を聞こうとして集ったときこれが王に知られた。
モーサ18,33,ここに於てノア王はアルマがわが民を扇動して謀叛をさせようとしていると言って、アルマとかれに従う人々を亡ぼすために軍隊をつかわした。
モーサ18,34,しかし、アルマと主の聖徒たちは王の軍隊がくると聞いて、その妻子をつれ天幕を持って荒野の中へ立ち去った。
モーサ18,35,その数はおよそ450人であった。
モーサ19,,モーサヤ書　第19章
モーサ19,*-*,むだな捜索。キデオンの氾濫。レーマン人の侵入。ノア王焼き殺される。ノア王の子リムハイ、貢をレーマン王に納めて君となる。
モーサ19,1,ノア王の兵は、主の聖徒たちを捜索したけれども、むだであったのでついに帰ってきたが、
モーサ19,2,ごらん、王の軍勢はすでに減って小さくなっていた。その時軍人でない民が分裂を起した。
モーサ19,3,そして数の少い方が王をおびやかして民の間に非常な不和が起った。
モーサ19,4,ここに民の中にギデオンと言う人があったが、強い男であって王の仇であったから剣を抜き怒りにまかせて王を殺すと誓った。
モーサ19,5,そこでギデオンは王と戦ったが、王は今やまさに負けようとするのを知り逃げ走って神殿の近くにある塔に昇った。
モーサ19,6,しかし、ギデオンはそのあとを追い、王を殺そうとしてまさにその塔に昇ろうとした。この時王がシュムロンの地をながめ見わたすと、見よ、レーマン人の群がはや国境へ侵入してきている。
モーサ19,7,そこで王は心に憂い苦しみ叫んで言った"ギデオンよ、見よ、レーマン人がおそい来ってわれらもわが民も亡ぼさんとする。さればわが生命を助けよ"と。
モーサ19,8,こうは言ったが、王は民のためよりも自分の命のことを心配していたのである。それにもかかわらず、ギデオンは王の命を取らないで助けた。
モーサ19,9,そこで王は民にレーマン人から逃げようと命じ、自分自身先に立って逃げたが、民もまた女子供をつれて荒野へと逃げ落ちた。
モーサ19,10,ところがレーマン人はそのあとを追い、追いついてかれらを殺し始めた。
モーサ19,11,ここに於て王は、男はみなその妻子を捨ててレーマン人から逃げよと命じた。
モーサ19,12,しかし妻子を捨てて逃げるよりは、むしろとどまって一しょに死にたいと思う者が多かったが、そのほかの者たちはみな妻子を捨てて逃げ去った。
モーサ19,13,妻子と一しょにのこった男たちは、きりょうの良い娘たちを先に立ててレーマン人が自分たちを殺さないように嘆願をさせた。
モーサ19,14,レーマン人はこの者たちの女子が美しいことに心を奪われて憐みの心を起し、
モーサ19,15,かれらの命を助け、とりこにしてニーファイの地へつれて行った。ここに於てかれらはノア王をレーマン人の手に引き渡し、自分たちの金銀およびもろもろの貴重品など、すべてその持物の半分を治めると言う約束でニーファイの地に住むことを許された。よってこのよ
モーサ19,15-1,かれらは年々レーマン人の王に貢を納めなくてはならなかった。
モーサ19,16,この時とりこになった者の中にノア王の息子が1人いて、その名をリムハイと行った。
モーサ19,17,リムハイはその父王が殺されたくないと思ったが、かれ自身は正しい人であったから父の犯した罪悪を知らないのではなかった。
モーサ19,18,一方ギデオンはノア王と王に従う人々を捜し求めるためひそかに人を荒野へつかわしたが、王と祭司たを除きそのほかすべての者たちに逢った。
モーサ19,19,この者たちはニーファイの地へ帰って、もしもその妻子やそれらと一しょにのこた男たちが殺されていたなら、まずそのかたきを打って一しょに死のうと心に誓った由であった。
モーサ19,20,しかしながら、ノア王が帰ってはならないと行ったので、かれらは怒って王を焼き殺してしまった。
モーサ19,21,そして、祭司らを捕えて殺そうとしたので祭司らはかれらから逃げ去った。
モーサ19,22,かれらがまさにニーファイの地へ帰ろうとするとき、ギデオンがつかわした者たちがこれと逢い、かれらの妻子がどうなったか言のしさいを物語り、またのこった民がその持物の半分を貢として納める約束でニーファイの地に住むことをレーマン人に許されたことを話し
モーサ19,23,かれらもまたギデオンのつかわした者たちに、ノア王を殺したことやその祭司たがはるか荒野の奥へ逃げて行ったことを知らせた。
モーサ19,24,かれらは挨拶を終ってから、その妻や子供たちが殺されなかったことを喜びながらニーファイの地へ帰り、ギデオンにはノア王をころしたことを告げた。
モーサ19,25,ここに於て、レーマン人の王はその民がノア王の民を殺さないと言う誓いをした。

モーサ19,26,リムハイはノア王の子であって、この時すでに人民に王と仰がれていたから、自分の民がその持物の半分を貢としてレーマン人の王に納めると言う誓いをした。
モーサ19,27,そしてリムハイはその国と民の平和とを固め始めた。
モーサ19,28,レーマン人の王はリムハイの民を国内に止まらせ、荒野へ逃げて行かないよう、その地のまわりに番兵を置き、ニーファイ人から取った貢で番兵を養った。
モーサ19,29,リムハイ王は2年間その国の平和を保ち、レーマン人もリムハイ王の民を苦しめまた亡ぼそうとはしなかった。
モーサ20,,モーサヤ書　第20章
モーサ20,*-*,ノア王の祭司たち、レーマン人の娘たちをさたって行く、レーマン人、リムハイ王とその民に仇を返そうとする。レーマン人追い払われ、なだめられる。
モーサ20,1,シェムロンには、レーマン人の娘たちが集って歌ったり踊ったり愉快に遊ぶ場所があったが、
モーサ20,2,ある日のこと、少しばかりの娘たちが歌い踊るためにここへ集った。
モーサ20,3,ノア王の差異sたちはニーファイ市へ蛙ことを恥じ、また民が自分らを殺しはせぬかと思って、自分らの妻子の居る所へ思い切って帰れず、
モーサ20,4,荒野の中にさまよっていたが、この時レーマン人の娘たちを見つけ、身をひそめてこれを見守っていた。
モーサ20,5,そして踊りに集った娘たちの数が少いときに、ノア王の祭司たちはその隠れ場所からおどり出てその娘たちをさらい荒野へつれて行った。こうしてさらわれたレーマン人の娘は24人であった。
モーサ20,6,レーマン人はその娘たちが行方知れずになったことを知ると、これはリムハイの民がしたことであると思って腹を立て、
モーサ20,7,軍勢を出して、王自ら民の先頭に立ってこれを率い、リムハイの民を亡ぼそうとしてニーファイの地へ進んで行った。
モーサ20,8,しかしながら、リムハイは塔の上からレーマン人を見つけ、ことごとくその戦の準備まで知って自分の民を召集し、畑にも森にも待伏せをした。
モーサ20,9,いよいよレーマン人がやってくると、リムハイの民はその隠れ場所から出て来てレーマン人におそいかかりこれを殺し始めた。
モーサ20,10,そして餌食を求める獅子のように戦ったから、戦は非常にはげしくなった。
モーサ20,11,リムハイの兵はレーマン人の半分の数にも足らなかったがついにレーマン人を追いはらった。リムハイの兵はまことに自分の命とその妻子とを守ための戦であったから必死になって戦った。
モーサ20,12,戦がすんで、かれらはレーマン人の戦死者の中にその王をみつけたが、王はただ傷を負っただけで死なず、その兵が急いで早く逃げたために戦場にとりのこされたのであった。
モーサ20,13,そこでかれらは王を捕えてその傷に繃帯を施し、リムハイの前へつれて言って、見よ、これはレーマン人の王である。王は負傷してその味方の死者の間に倒れて起き去りにされたのであるが、われらはただ今の御前へつれてきた。殺してしまおう、と言った。
モーサ20,14,しかしリムハイは"殺してはいけない。ここにつれてきてわれに見せよ"と言った。そこでかれらが王をつれてきたのでリムハイはかれに向って"王は何故に来ってわが民と戦われるか。ごらんなされ、わが民はわれと王との結んだ誓いを破らなかった。しかるに、王は
モーサ20,14-1,王は何故わが民と結んだ誓いを破られたのか"と問うた。
モーサ20,15,するとレーマン人の王は"われがこれを破ったのは、汝の民がわが民の娘らをさらって言ったからで、われはこれ怒ってわが民を汝と戦わせたのである"と答えた。
モーサ20,16,リムハイは少しもこの出来事を聞いていなかったので"われはわが民をしらべて、かようなことをした者があるならば誰であってもこれを殺すであろう"と言って人民の間をしらべさせた。
モーサ20,17,この時ギデオンはリムハイ王の軍の総大将であったが、王が命じたとりしらべのことを聞き、王の前に進み出て言った。ねがわくは忍んで人民をしらべることを止め、このとがを人民に負わせないように。
モーサ20,18,王は、王の父君の祭司であって、王の民が殺そうとした者たちのことを憶えておりたもうか。あの差異Sたは今荒野にさまよっているのではないか。かれらこそレーマン人の娘をさらった者ではないか。
モーサ20,19,どうか不覚考えてレーマン人の王にこの次第を知らせたまえ、そうすれば、王はその民にもこれを伝えて民はわが方に対して和ぐようになる。見よ、レーマン人は今やわが方を攻めるために出陣の容易をしている。その上、わが方の人数は僅かしかない。
モーサ20,20,かれらは大軍をもって攻めてくるのであるから、王がかれらにわが方と和らがせなかったならば、わが方は亡びるにちがいない。
モーサ20,21,アビナダイが私共について予言をしたことは、私共が主の道に聞き従わず罪悪を悔い改めなかった

のでみな成就したではないか。
モーサ20,22,それであるから、今レーマン人の王をなだめよう。私共は命を失うよりは奴隷の境涯にある方がよいから、さきにこの王と結んだ誓いを守り、そしてこのような多くの血を流すことを止めようではないかと。
モーサ20,23,ここに於てリムハイはレーマン人の王にその父のことと荒野へ逃げた祭司らのことをくわしく物語り、レーマン人の娘たちをさらったのはこの祭司らのしわざであると言った。
モーサ20,24,そこでレーマン人の王はリムハイの民に対する怒りを解き、その民に”武器を持たないで言ってわが軍に会おうではないか。そうすれば私はわが軍がリムハイの民を殺さないこと誓う”と言った。
モーサ20,25,そこでリムハイの民はレーマン人に会うため、レーマン人の王に従い武器をもたないで出て行った。そしてレーマン人に会ったとき、レーマン人の王は自分の民の前に伏してリムハイの民のためにとりなしをした。
モーサ20,26,レーマンにんはリムハイの民が武器を持っていないのを見て、これを憐れんで怒りを解き、その王を伴っておだやかに国へ帰った。
モーサ21,,モーサヤ書　第21章
モーサ21,*-*,アビナダイの予言さらに成就する。奴隷の境涯にあるニーファイ人、非常な苦しみを受ける。主がニーファイ人の敵の心を柔らげたもう。かの24枚の版に就いてさらに説く。
モーサ21,1,リムハイはその民と一しょにニーファイ市に帰り、また平和にその地に住むこととなった。
モーサ21,2,ところがそれから長らくたって、レーマン人がまたニーファイ人に対して怒り出しその国境に侵入した。
モーサ21,3,しかし、王がリムハイとした誓いがあるので思い切ってニーファイ人を殺しはしなかったが、たびたびその顔を打ち権威を奮ってその背に重荷を負わせ、物が言えねろばのように追い使うようになった。
モーサ21,4,これはみな主の御言葉を成就させるために起ったのである。
モーサ21,5,さてニーファイ人は非常に艱難をしたが、レーマン人が4方から取り囲んでいたので、レーマン人の手からのがれることができなかった。
モーサ21,6,よって人民はその艱難に堪えず、王につぶやいてレーマン人と戦わせてくれえとたのみ、苦情をとなえてひどく王をなやましたので、王はついにその望み通りにせよと許した。
モーサ21,7,そこで人民は再び集ってよろいを着け、レーマン人を国から追い払おうと出陣をした。
モーサ21,8,ところがレーマン人が勝ってリムハイの民を追い返し多くの者を殺した。
モーサ21,9,ここに於てリムハイの民の中に大きな嘆きと悲しみとがあり、やもめはその夫の亡くなったのを嘆き、息子や娘はその父の亡くなったのを嘆き、兄は弟の、弟は兄の亡くなったのを嘆いた。
モーサ21,10,ところで、今や国中にあるやもめの数が非常に多く、襲うてきたレーマン人をひどく恐れて毎日毎日泣き叫んだ。
モーサ21,11,かれらがたえず泣き悲しんでいるために、リムハイの民の中でのこっている者たちが奮い起ってレーマン人のことを怒り、再び戦に出たけれどもまた追い返されて多くの損害を受けた。
モーサ21,12,かれらは3度までも出て戦ったが同じように損害を受けたので、殺されなかった者はまたニーファイ市に帰り、
モーサ21,13,甚しい屈辱を受けて奴隷のくびきを受け、敵の個々rのままに打たれたり、ここかしこに追われたり、重荷を追って苦しめられるに任せた。
モーサ21,14,かれらは自ら低くへりくだって切に神に祈り、終日その難儀を境涯がら救いたもうように祈った。
モーサ21,15,主はかれらが犯した罪悪があるから、かれらの切な願いを容易には聞きとどけたまわなかったが、後にはこれを聞き入れてようやくレーマン人の心を和らげたもうたので、レーマン人の苦労を軽くした。しかしこれを奴隷の境涯から救うことは主のみこころにかなわなか
モーサ21,16,さて、その後ニーファイ人はその土地で次第に栄えて豊かに穀物を作り、家畜の群を飼ったので、飢えに苦しめられることはなかった。
モーサ21,17,しかし女の数が男よりも多かったので、リムハイ王はやもめたちとその子らが飢死をしないよう、男はみな施しをしてこれたを助けるように命じた。これはさきに殺された者が多かったからそうしたのである。
モーサ21,18,リムハイ王の民はなるべく居る所をまとめて一団になり、その穀物と家畜とを安全に守った。
モーサ21,19,また王は自身が何らかの方法でレーマン人の手に落ちることを恐れ、護衛の兵なしには市の城壁の外へ安心して出ようとはしなかった。
モーサ21,20,また王は荒野へ逃げこんでレーマン人の娘たちをさらい、ニーファイ人にこのような大きな災を蒙らせた祭司たちを何とかして捕らえるため自分の民にまわりの土地を見張らせた。
モーサ21,21,あの祭司たちは、また夜にニーファイの地へしのびこみ、民の持っている穀類や多くの貴重品を取って行ったから、民はかれらを捕えて罰してやりたいと思って待ちかまえていた。
モーサ21,22,これから後が国へ来るまで、レーマン人とリムハイの民の間に2度と争いが起ることはなかった。
モーサ21,23,リムハイ王はさきにその護衛兵と一しょに城門のそとに居たとき、アンモンとその兄弟らを見てこれをノ

アの祭司たちだと思ったから、かれらを捕えさせしばって牢屋へ入れたの出逢った。かれらがもしも本当にノアの差異sであったなら王はかならずこれを殺させたで
モーサ21,24,ところが王はそれが祭司らでなくて、ゼラヘムラの地からきた兄弟たちであることを知って非常に喜んだ。
モーサ21,25,リムハイ王はゼラヘムラを見つけるために、アンモンが来る前に少しばかりの人を派遣したことがあったが、これらの者はゼラヘムラを見つけることができずに荒野の中をさまよって歩いた。
モーサ21,26,それでもかれらは前に或る民が住んでいたが今は白骨が1ぱいに散らばっている所、すなわち前に或る民が住んでいたがその後荒されて地を見つけて、これがゼラヘムラの地であると思ってニーファイの地へ帰ってきた。そしてかれらが国の栄えへ着いたのはアンモンが
モーサ21,26-1,前のことであった。
モーサ21,27,かれらは国へ蛙ときに、かれらが見つけた骨をのこした民の歴史を誌した記録を持って帰ったが、それは金版の上に刻んであった。
モーサ21,28,さてリムハイ王は、モーサヤが神から受けた賜物を持っていて、これを使ってこのような版に刻んだ文字を訳することができるとアンモンから聞いて知り、また一方ならず喜び、アンモンもまた共に喜んだ。
モーサ21,29,しかしアンモンについてきた兄弟たちは、同じ兄弟たちであるリムハイの民が多く殺されたのを悲しみ、
モーサ21,30,またノア王とその祭司たちが神に対して多くの罪悪を民に行わせたのを悲しみ、アビナダイの市んだことを悲しみ、神の能力と権威とアビナダイが伝えた言葉を信ずる信仰とによって神の教会を立てたアルマとアルマに従った人たちが立ち去ったことを悲しんだが、
モーサ21,31,その行方を知らなかったから、かれらが立ち去ったことを非常に嘆き悲しんだ。アンモンとアンモンについて来た兄弟たちは、神に仕えてその命令を守ことをすでに誓約した者たちであるから、アルマの居る所を知ったならば喜んで必ずその仲間に加わったことであろう
モーサ21,32,さてアンモンがこの国へきてから、リムハイ王は神に仕えてその命令を守る誓約を神と結び、民の中にもこの誓約を結ぶ者が多かった。
モーサ21,33,リムハイ王と多くの民たちはバプテスマを受けたいと望んだけれども、その国中に神から権能を授かって今これを持っている者が1人もなかったので、アンモンは自分はバプテスマを授ける資格のないしもべであると考えて、バプテスマの儀式を施すことをことわった。
モーサ21,34,従って、かれらはその時教会を自分たちで立てることをせずに、主の"みたま"を待つことにした。かれらは荒野へ難を避けたアルマとその兄弟たちのようになりたいと思い、
モーサ21,35,また誠心から喜んで神に仕える証拠としてバプテスマを受けたいとひたすら望んだけれども、この望みのかなう時はおそくなった。そのバプテスマの記事はあとからこの版にのせる。
モーサ21,36,アンモンとアンモンについてきた人々とリムハイ王とその民とは、もっぱらレーマン人の支配と奴隷の境涯から脱するために個々rをつくして考えた。
モーサ22,,モーサヤ書　第22章
モーサ22,*-*,レーマン人のかけたくびき投げすてようと計画する。ギデオンの献策。レーマン人、酒に酔わされる。とりことなったニーファイ人たち逃げてゼラヘムラへ帰る。ゼニフの記録終る。
モーサ22,1,そこでアンモンとリムハイ王とは、奴隷の境涯からまぬかれる方法を人民と協議しはじまた。そして全国の民がこの問題についてどう考えるかを知るために全部の民を集めた。
モーサ22,2,ところが、レーマン人の方がはるかに人数が多かったから、リムハイの民がレーマン人と剣を以て戦って奴隷の境涯を脱するなどはとてもおぼつかなく思えたので、その女子供ならびに天幕家畜などを携えて荒野へ立ち去る意外にはこの境涯をまぬかれる途はなかった。
モーサ22,3,このときギデオンは王の前に進み出て言った。王よ、今日まで私供が同胞であるレーマン人と争ったとき、王はたびたび私の言葉を用いたもうた。
モーサ22,4,王よ、もしあなたが私を役に立たない家来と見ず、またこれまで多少なりとも私の言葉を採用してその言葉が役に立っていたならば、このたびも私の言葉に耳を傾けていただきたい。私はかならず王のしもべとなって働き、この民を奴隷の境涯から救い出すと。
モーサ22,5,そこで王はギデオンに許してその意見を述べさせた。よってギデオンは、
モーサ22,6,この市の後ろにある城壁を通る裏道がある。あそこに居るレーマン人の番兵は夜酒に依っているから、わが民にふれを廻して家畜の群を集め夜の中にこれを荒野へ追い立てて行かせよう。
モーサ22,7,さて私を王の命令に従い、最后の貢である葡萄酒をレーマン人に治める。するとかれらは飲んで必ず酔うから、酔って眠っている間に私たちは陣営の左にある間道を通って外へ出る。
モーサ22,8,こうして私たちは、女子供と家畜の群をつれて一しょに荒野へ立ちのき、シャイロムの地を廻って旅路を

進むのである、と王に述べた。
モーサ22,9,リムハイ王はギデオンの言葉を用いて、
モーサ22,10,人民にその家畜の群をことごとく集めさせ、さて貢である葡萄酒をレーマン人に納めたが、このたびは贈物として平生よりもたくさんさし出した。レーマン人はリムハイ王の贈った葡萄酒を遠慮せずに充分飲んだ。
モーサ22,11,そしてその晩リムハイ王のその家畜の群を追って荒野へ立ちのき、荒野の途を伝ってシャイロムの地を周り、アンモンとその兄弟たちに導かれてゼラヘムラの地へ向って旅を進めた。
モーサ22,12,かれらは自分らの金銀およびもてるだけの貴重品あるいは食料を持って荒野へ出たのであるから、途中何事もなく旅路を進んだ。
モーサ22,13,そして荒野の中に多くの日を重ねてから、かれらはゼラヘムラの地に着き、その地の民と一しょになってモーサヤ王の臣民となった。
モーサ22,14,モーサヤ王は喜んでかれらを迎え、かれらの記録とリムハイの民が見つけた記録とを受けた。
モーサ22,15,レーマン人はリムハイの民が夜の間に立ちのいたことを知り、すぐに軍勢を出して荒野の中へ追跡させたが、
モーサ22,16,2日の間老いかけても、もはやその跡をつけることができず荒野の中をさまよって歩いた。
モーサ23,*-*,ノア王の民のため荒野へ追い払われたアルマと主の聖徒らの記録。第23章、第24章。
モーサ23,,モーサヤ書　第23章
モーサ23,*-*,アルマ、王になることをことわる。ヒーラムの地レーマン人に占領される。ノア王の悪い祭司の頭アミュロン、レーマン人の王に属して司となる。
モーサ23,1,アルマは、ノア王の軍勢が自分と聖徒らを捕えにくるとを主から知らせを受けたのでこれを自分の民に知らせたから、民はその家畜を集め何ほどかの穀物を持ちノア王の軍を避けて荒野へ立ちのいた。
モーサ23,2,主はノア王の軍が追いついてかれらを亡ぼさないように力を貸したもうた。
モーサ23,3,それで、かれらは荒野へのがれてから8日の間旅をしたところ、
モーサ23,4,清水があって非常に景色の美しいたのしい土地へ着き、
モーサ23,5,天幕を張って土地耕し家屋などを建てはじめ、本当に努力をして働いた。
モーサ23,6,ここでアルマはその民から愛せられたので、民はアルマに王になってほしいと思ったが、
モーサ23,7,アルマはかれらに答えて言った"私たちに王がある必要はない。主の御言葉に'汝らはこの人をかの人よりも優れりと思うべからず。この人は自らかの人に優れりと思うべからず"とある。それであるから、私はあなたたちに王がある必要はないと言うのである。
モーサ23,8,しかしながら、あなたたちがもしも義しい人をいつも王にいただくことができるならば、王のあるのもよいであろう。
モーサ23,9,しかし、ノア王とその祭司らが行った罪悪を忘れるな。私自身もそのわなにかかって主の目から見て憎らしい多くの行いをしたから、その後自分からひどく悔改めをした。
モーサ23,10,しかし、私がひどく苦しんでから主は私の嘆願をきき入れたもうて、私の祈りにこたえ、私を使ってこのように数多いあなたたちに主の真理を知らせたもうた。
モーサ23,11,さりながら、私はこれを誇りに思う者ではない。私は自分から誇るに足らぬ者であるからである。
モーサ23,12,今私はあなたたちに言う。あなたたちはノア王にしいたげられ、王とその祭司たちとに奴隷にされ、かれらのために罪の淵に沈められた。従ってあなたたちは罪悪の縄でしばられたのである。
モーサ23,13,今やあなたたちは、神の能力によってその縄目すなわちノア王とその民の支配と罪悪の縄目から救われた。それであるからあなたたちは自分にしてくれたこの自由の途を確く守り、誰であってもその人を信じて王にしないようにしてほしい。
モーサ23,14,また誰であっても神の心にかない神の道を歩み神の命令を守る者でなければ、その人を信じて教師または教会の指導者にしないようにしてほしい"と。
モーサ23,15,アルマはまた人は自分自身を愛するように隣人を愛さなくてはならぬことと、民の間に争いがあってはならなぬこととをその兄弟たちに教えた。
モーサ23,16,そしてかれらの教会の創立者であったから、その大祭司となった。
モーサ23,17,さて教えを説きまた道を教える権能がある者は、アルマの手を経て神からその権能を受けた者意外にはなかったので、祭司らと教師らはみな聖められたが、正しい人でなくては何人も聖められなかった。
モーサ23,18,それであるから、祭司らと教師らはその民を見護り義しさに関わる教訓を与えて民を養った。
モーサ23,19,その中にかれらは次第にこの地で大いに栄え、その所をヒーラムと呼んだ。
モーサ23,20,民はヒーラムの地で速にふえて非常に栄え、ヒーラム市と言う都市を建てた。
モーサ23,21,しかしながら、聖徒を懲らしめその忍耐と信仰とを試したもうは主のみこころにかなうことである。

モーサ23,22,さりながら、主に頼って信仰する者は終りの日に高く上げられるはずの者であるから、アルマとその民も主の懲らしめと試しとを受けた。
モーサ23,23,ごらん、私はかれらが奴隷にされたことと、かれらの神である主すなわちアブラハム、イサク、ヤコブの神のほかにはかれらを救った者がなかったこととをあなたたちに示そう。
モーサ23,24,神は本当にかれらを救ってその大能を現したもうたから、かれらは非常に喜んだ。
モーサ23,25,ごらん、アルマとその民がヒーラムの地にあるヒーラム市に住んでいたころ、そのまわりの土地を耕していた時にレーマン人の1軍が国境に現われた。
モーサ23,26,そこでアルマの兄弟たちは、自分らの畑から逃げてヒーラム市の中に集り、レーマン人が現われたために非常に恐ろしがった。
モーサ23,27,しかし、アルマは出て言って兄弟たちの中に立ち、恐ろしがらずに自分たちの主なる神を心に思って神に頼め、そうすれば神は助けたもうとかれらに勧めたので、
モーサ23,28,兄弟たちはその恐れを鎮め、レーマン人が自分たちと妻子を殺さないようにレーマン人の心を和らげたまえと主に祈りを捧げた。
モーサ23,29,すると、主はレーマン人の心を本当に和らげたもうた。そこでアルマとその兄弟たちは一しょに建て言ってレーマン人に幸福をしたから、レーマン人はヒーラムの地を占領した。
モーサ23,30,さて、レーマン人のこの軍隊はリムハイ王の民のあとを追いかけた者であって、久しい間荒野の中をさまよっていたが、
モーサ23,31,とうとう、アミュロンと言う所でノア王の祭司たちを見つけた。アミュロンとはノア王の祭司たちが名ずけた名前である。その多岐祭司たちはすでにアミュロンの地は住んで土地を耕していた。
モーサ23,32,そして祭司たちの名をアミュロンと言ったが、
モーサ23,33,かれはひたすらレーマン人に命を助けてくれるように願い、もとはレーマン人の娘であって今自分らの妻になっている女たちをつかわして、その夫である自分たちを殺さないよう、同胞であるレーマン人に嘆願をさせた。
モーサ23,34,そこでレーマン人はアミュロンとその兄弟たちを憐み、その妻たちに免じてかれらを殺さなかった。
モーサ23,35,このようにしてアミュロンとその兄弟たちはレーマン人に加わり、ニーファイの地を探ろうとして荒野を旅している時にアルマとその兄弟たちが住んでいたヒーラムの地を見つけたのであった。
モーサ23,36,ここでレーマン人は、もしもアルマとその兄弟たちがニーファイの地へ行く道を自分たちに教えてくれるならば、命を助けて自由を許してやると約束をした。
モーサ23,37,ところがアルマがニーファイの地へ行く道を教えてやった後も、レーマン人はその約束を守らず、かえってアルマとその兄弟たちを束縛するためにヒーラムの地のまわりに番兵を置き、
モーサ23,38,のこりの兵はニーファイの地へ行ったけれども、その1部はヒーラムの地にのこっていた番兵の妻子をつれてまたヒーラムの地へ戻ってきた。
モーサ23,39,レーマン人の王は、ヒーラムの地に居るレーマン人の王となり司となることをアミュロンに許したけれども、アミュロンはレーマン人の王のこころに背いて言を行う権力はもっていなかった。
モーサ24,,モーサヤ書　第24章
モーサ24,*-*,アミュロン、アルマとアルマに従う人々を迫害する。主はかれらの重荷を軽くし、かれらを束縛から免れさせたもう。ゼラヘムラへ帰国する。
モーサ24,1,アミュロンはレーマン人の王に気に入られたので、レーマン人の王はアミュロンとアミュロンの兄弟たちがしぇむろんの地とシャイロムの地とアミュロンの地とに住む民の教師になることを許した。
モーサ24,2,レーマン人はすでにこれらの地をみな占領していたので、レーマン人の王は人を選んでこれらを各地の王とした。
モーサ24,3,レーマン人の王はその父の名を取ってレーマンと名づけたので、人々はこれをレーマン王と呼んだ。レーマン王の治めている民の数は非常に多かった。
モーサ24,4,レーマン王はアミュロンの兄弟たちから人を選んび出して自分の民が住んでいる各地の教師に任じたから、ニーファイの言葉をすべてのレーマン人に教えるようになった。
モーサ24,5,レーマン人は互に親しみ合ったが、神のことは知らなかった。またアミュロンの兄弟たちはかれらの神である主について何にも教えず、またモーセの律法もアビナダイの言葉も教えず、
モーサ24,6,ただ自分たちの記録を書くことを教え、また互いに文通ができるようにこれを教えた。
モーサ24,7,このようにしてレーマン人は次第に富ができて商売をすることを始め、盛大で世間の智恵にトンだ抜け目のない民となった。まことにかれらは非常にずるかしこい民であって同国人の間がらでない人たちに大してはいろいろな罪を犯し、物を掠め取ることを楽しみにした
モーサ24,8,さてアミュロンは次第にアルマとその兄弟たに向って権力を振い、アルマを迫害しまた自分の子らにア

ルマとその兄弟たちの子らを迫害させるようになった。
モーサ24,9,アミュロンはアルマを知っており、またアルマがもとノア王の祭司の1人であったがアビナダイの言葉を信じたのでノア王に追い払われたことを知っていたから、アルマに怒りを抱いて、自分もまたレーマン王の部下であるのにアルマとその兄弟たちに向い威勢を奮って
モーサ24,9-1,難儀な仕事をさせまたこれを追い使う者たちを置いた。
モーサ24,10,よってアルマとその兄弟たちは非常な苦しみを受けたので一生けんめい神に願い求めた。
モーサ24,11,しかし、アミュロンはこのように神に願い求めることを止めよと言ってこれを見張る者を置いた。そして神に祈っているところを知られた者があると言うと、その者は殺されねばならぬことになった。
モーサ24,12,それでアルマとその兄弟たちは、声をあげては自分らの神である主に祈りを捧げなかったが、黙ってその心を神にうちあけたので神はその胸の中の願いを知りたもうた。
モーサ24,13,かれらが苦しんでいた時主の御声がかれらに聞こえて嗣ぎのように言いたもうた"頭を高くあげて心に慰めを得よ。われは汝らがわれと結びし誓約を知る。われはわが聖徒らと誓約を結びてこれを奴隷の境涯より救わん。
モーサ24,14,われはまた汝らの肩に負わせたる重荷を軽くし、汝らが奴隷である間にさえ背にその重さを感ぜざらしめん。われがこのようになすは、汝らをこの後われを証する者とし、また主にして神なるわれが、わが民の苦しむ時これを憐れみて助くることを確に汝らに知らしむる
モーサ24,14-1,と。
モーサ24,15,アルマとその兄弟たに負わされた重荷は軽くなった。主がわれらを強くなしたもうたのでかれらは容易にその難儀な仕事に堪えられるようになった。それでかれらは愉快に辛抱して全く主のみこころに服従した。
モーサ24,16,このようにその信仰と忍耐が強かったので主の御声がまたかれらに聞こえて仰せになった"心に慰めを得よ。われは明日汝らを奴隷の境涯より救わん"と。
モーサ24,17,そして主はアルマに命じて言いたもうた"汝はこの民の先に立ちて率いよ。さらばわれは汝と共に行き、この民を奴隷の境涯より救い出さん"と。
モーサ24,18,それでアルマとアルマの民は夜間その家畜とその穀物の幾分とを集めたが家畜を集めるために一晩中働いた。
モーサ24,19,そのあくる朝、主はレーマン人をよく眠らせたもうたから、民を追い使う者たちはみなぐっすりと眠っていた。
モーサ24,20,そこでアルマとその兄弟たちはすぐさま荒野へのがれたが、1日中旅をしてある谷に天幕を張った。この荒野の旅はアルマが先に立って人々を導いたので、かれらはこれをアルマの谷と呼んだ。
モーサ24,21,神はすでにかれらを憐みその重荷を軽くしかれらを奴隷の境涯から救いたもうたので、かれらはこのアルマの谷で神に感謝を捧げた。かれらが奴隷であった時、その神である主のほかには誰もこれを救うことができなかったのである。
モーサ24,22,かれらは男も女も子供もおよそ声をあげて物が言える者はみなその神に感謝し声高らかに讃美を捧げた。
モーサ24,23,すると主がアルマに命じて言いたもうた"汝と汝の民は急ぎてここをのがれ去れ。レーマン人はすでに目を覚まして汝らのあとを追えば汝らここをのがれ去れ。われはレーマン人が汝の民を追いてここを通りすぎざるよう、レーマン人をこの谷にて止むべし"と。
モーサ24,24,そこでかれらは谷を去って荒野へ進み、
モーサ24,25,12日間荒野を旅してからゼラヘムラの地に着いたが、モーサヤ王は非常に喜んでかれらを迎えた。
モーサ25,,モーサヤ書　第25章
モーサ25,*-*,ミュレクの子孫、ゼラヘムラの民。ゼニフの記録とアルマの記事を民に読んで聞かせる。アルマ、全国にキリストの教会を立てることを認可せられる。
モーサ25,1,さて、モーサヤ王は全国の民を集めた。
モーサ25,2,ここにニーファイの子孫は、ニュレクと一しょに荒野へやってきた人々の子孫であるゼラヘムラの民ほど数多くはなかった。
モーサ25,3,そしてニーファイの民とゼラヘムラの民とを合わせてもその数は少くてレーマン人の半分にも足らなかった。
モーサ25,4,そしてニーファイの民の全体とゼラヘムラの民の全体は2箇所に集っていた。
モーサ25,5,さてモーサヤ王は全国の民に向い、ゼニフの書いた記録の中で、ゼニフの民ガゼラヘムラの地を立ち去ってからまた帰ってくるまでのことを自分も読みまた人にも読ませ、
モーサ25,6,またアルマとその兄弟たちの記事、ならびにかれらがゼラヘムラの地を立ち去ってからまた帰ってくるまでに受けた艱難の記事を読んだ。

モーサ25,7,さてモーサヤ王がこれらの記録を読み終ったときに、ゼラヘムラを立ち去らなかったモーサヤ王の民は非常に驚きまた不思議に思った。
モーサ25,8,かれらが奴隷の境涯から救われた人々をながめると、これらの人々はみな非常に大きな喜びに満たされていたので、何と思ってよいか解らなかったからである。
モーサ25,9,しかし、かれらはレーマン人に殺された同胞のことを思っては嘆き悲しんでさめざめと涙を流し、
モーサ25,10,神がアルマとその兄弟たちをレーマン人の手から救って奴隷の境涯を眼抜かれさせたもうた早速の恵みと大きな能力とを思っては声をあげて神に感謝し、
モーサ25,11,またその兄弟であるレーマン人の罪深い汚れたさまを思っては、かれらの身も霊もどうなるかと胸を痛めて悲しんだ。
モーサ25,12,レーマン人の娘たちを妻としたアミュロンとその兄弟たちの子らもここに居たが、自分らの父の行為をこころよく思わず、父と同じ名前で呼ばれたくないと思って甘んじてニーファイと言う名前を受けた。それはニーファイの子孫と呼ばれニーファイ人と共に数えられる
モーサ25,12-1,であった。
モーサ25,13,今やゼラヘムラの民はみなニーファイ人の中に数えられた。それはニーファイの子孫のほかにこの国の王の位をつぐ者はなかったからである。
モーサ25,14,さてモーサヤ王はその民に語り終り読み終って、アルマもまた話をしてもらいたいと言った。
モーサ25,15,それでアルマは民があっちこちに大勢集っている時にこの群衆からあの群衆へと歩いて言って、悔い改めて主を信じなくてはならぬことを宣べ伝え、
モーサ25,16,また奴隷の境涯から救われたリムハイとその兄弟たちには、かれらを救いたもうたのが主であることを忘れてはならないと勧めた。
モーサ25,17,アルマがその民に多くのことを教え終り語り終ると、リムハイ王もそのすべての民も一しょにバプテスマを受けたいと願った。
モーサ25,18,そこでアルマは水の中に入り、これらの人々にバプテスマに施したが、ちょうどモルモンの泉で兄弟たちに施したと同じ方法でこれらの人々にバプテスマを施した。そして、アルマがバプテスマを施した人々はみな神の教会に属したが、これは全くアルマの言葉を信じた
モーサ25,19,モーサヤ王はゼラヘムラの全国に教会を立て、各地方の支部教会を司どるために人を按手礼を施し、これを祭司と教師とに任ずる権能をアルマに許した。
モーサ25,20,このようにしたのは民の数が非常に多くて1人の教師にはすべての人を司どることができず、また1箇所の集会では神の道をすべての人に聞かせることができなかったからである。
モーサ25,21,それであるから民は支部教会と言う別々の解に集り、どの教会にも何人かの祭司と教師とがあって、どの祭司もみなアルマが親しく教えた道をそのまま伝えた。
モーサ25,22,このように多くの支部教会があったけれども、それらはみな唯一の教会であってすなわち神の教会であった。一切の支部教会では悔改めと神を信ずることのほかには何事も教えなかった。
モーサ25,23,さて、ゼラヘムラの地には7つの支部教会があってキリストの御名を受けたいと思う者はことごとく神の教会へ入った。
モーサ25,24,そして教会へ入った者は神の聖徒と言ったが、主がその"みたま"を賜うたから恩恵を受けてその地で繁栄をした。
モーサ26,,モーサヤ書　第26章
モーサ26,*-*,不信者と悪人たち。主がアルマにこれらの者を裁く方法を教えたもう。
モーサ26,1,そのころの和解ものの中には、ベンジャミン王が民に教えを告げた時まだ幼児であってその言葉を会得できない者が多かった。それで、このような者たちは今その先祖の言伝えを信ぜず、
モーサ26,2,また死者の復活に関する教えもキリストの降臨に関する教えも信じなかった。
モーサ26,3,かれらはその不信仰のために、神の道を理解することができなくてその心がかたくなってしまっていた。
モーサ26,4,従ってかれらはバプテスマを受けようともせず、また教会に入ろうともせず、その信仰については全然違った民となり、いつまでもその有様で肉欲にふけり罪悪を犯した。それはその神である主に祈り求めようとしなかったからである。
モーサ26,5,モーサヤ王が統治をしたころ、このような者の数は神の聖徒の半分にも達しなかったが、教会員の中に紛争が起ったがため、後になってその数はとうとう聖徒の数以上になった。
モーサ26,6,かれらは甘い言葉で多くの教会員をだまし、多くの罪悪を犯させた。それであるから、教会の会員の中で罪を犯した者を教会が説諭することが必要になったので、
モーサ26,7,教師たちはこれらの者をつれて行ってこれを祭司たちにわたし、祭司たちはまたこれらの者を第祭司であるアルマの前へつれて行った。

モーサ26,8,モーサヤ王はこの時すでに教会を司どる権威をアルマに与えていた。
モーサ26,9,アルマはつれて来られた人々をどう裁いてよいかわからなかったが、これらの者に反対する証を立てる人が多くあって充分にその罪悪を証明した。
モーサ26,10,これより前にはこのような事件が教会内に起ったためしがなかったので、アルマは心配をしてこの者たちを王の前へつれて行かせ、
モーサ26,11,さて王に、見よ私どもはこの多くの者たちを王の前へつれてきた。これらの者はその兄弟たちに訴えられた者であって、まことにいろいろな罪悪を行うところを認められている。ところがその罪を悔い改めないから、それぞれの罪に応じて王が裁判をして下さるよう、こ
モーサ26,11-1,王の前につれてきた。
モーサ26,12,ところがモーサヤ王はアルマに"われはこれを裁判しない、汝の手にわたして裁判をさせる"と言ったので、
モーサ26,13,アルマは再びその心を苦しめ、この事件をさばく時に神の御前に過ちを犯すことを恐れて、神の御前に行ってこの事件を処理する方法を神に伺った。
モーサ26,14,アルマはその全身全霊をかたむけて神に乞いねがったので、主の御声が聞こえてアルマに言いたもうた。
モーサ26,15,"アルマよ、汝はさいわいなり。またモルモンの泉の中にてバプテスマを受けたる者たちもさいわいなり。汝はわが僕アビナダイの言葉のみを確く信ずるよりさいわいなり。
モーサ26,16,バプテスマを受けたる人々も汝に言われたることのみを確く信ずるによりさいわいなり。
モーサ26,17,汝はこの民の中に教会を立てたるによりさいわいなり。その会員らは立てられてわが民と成るべし。
モーサ26,18,まことに喜びてわが名を受くるこの民はさいわいなり。かれらはわが名によりて呼ばれ、わがものとなるべし。
モーサ26,19,また汝は罪を犯したる者につきてわれに問いたずねたるによりさいわいなり。
モーサ26,20,汝はわが僕なり。われは汝に永遠の生命を授くることを誓う。汝はわれに仕えわが名により出で行きてわが羊を集めよ。
モーサ26,21,わが声に聞き従う者はわが羊となるべし。汝はかかわる者を教会に迎え入れざるべからず。われもまたこれを迎えん。
モーサ26,22,見よ、この教会はわが教会はわが教会なり。バプテスマを受くる者はみなすでに悔い改めたる強固にバプテスマを受けざるばからず。汝らが教会に迎え入るる者はみなわが名を信ぜざるべからず。さらば、われは惜気もなくこれに赦しを与えん。
モーサ26,23,世の人の罪を負う者はわれなり。世の人を造りし者はわれにして終りまで信ずる者にはわが右に居ることを許す。
モーサ26,24,見よ、終りまで信ずる者はわが名によりて呼ばるる故に、もしわれを知るならばよみがえりて永久にわが右に居る。
モーサ26,25,第2のラッパの鳴る時われを知りしことのなき者よみがえりてわが前に立つべし。
モーサ26,26,その時、われらはわれがその神にして主また贖い主なるに、われに亜が縄恋とせざりしことを知るべし。
モーサ26,27,その時われはかれらに向い、われいまだかつて汝らを知らずと言わん。かくて、かれらは悪魔とその使たちのために備えたる無限の日に入るべし。
モーサ26,28,この故にわれ汝たに告ぐ。わが声に聞き従わざる者は汝らこれをわが教会に入るるべからず。われはこの者を終りの日に受けざればなり。
モーサ26,29,いざ、汝ら行きて何人にてもわれに大して罪を犯す者をその罪に応じて裁判せよ。されど、もしもかれが汝とわれとにその罪を白状し真心より悔い改むるならば汝はこれを緩背、われもまたこれを赦すべし。
モーサ26,30,まことにわれはわが聖徒らの悔い改むる毎にかれらのわれに対する罪を赦す。
モーサ26,31,汝ら互いに罪を赦せ。まことに隣人自ら悔い改めたりと言うときにその罪を赦さざる者は、これがために自ら罪に当る故なり。
モーサ26,32,汝行け、およそその罪を悔い改めざる者はみなわが聖徒の中に数えらるべからず。汝らこれより後この戒めを守れ"と。
モーサ26,33,アルマはこの戒めを聞いた後、これを保存するためと神の命令によって教会員を裁判するために書き留ておいた。
モーサ26,34,それから、アルマは行って罪を犯すところを認められている者たちを主の戒めによって裁判をしたが、
モーサ26,35,その罪を悔い改めてこれを白状した者は、みな教会の聖徒らの中に数えたけれども、
モーサ26,36,その罪を白状せず悪事を悔い改めない者はみな教会の聖徒の中から除かれその名を削られた。

モーサ26,37,アルマが虚有無のすべてを支配したによって、教会は再びいだやかになり、事情によく栄えはじめて神の御前に慎んで歩み、多くのひとを教会に入れ、多くの人にバプテスマを施した。
モーサ26,38,さて教会を司ったアルマとその同僚はすべてこれらの努めをし、全く勤勉に働き、万事について神の言葉を教え、いろいろな艱難を耐え忍び、神の教会に属していない人々から迫害を受けた。
モーサ26,39,かれらはねんごろにその兄弟たちを戒めたが、自分らもまたすべての人々も、各々現在犯している罪悪また過去に犯した罪悪に応じて神の言葉によって戒めを受け、またたえず祈ることと万事について感謝をしなくてはならぬことを神に命ぜられた。
モーサ27,,モーサヤ書　第27章
モーサ27,*-*,無信仰が教会員を迫害すつことを禁じ、平等たるべきことを命ずる。アルマの息子とモーサヤの4人の息子、無信仰の仲間に加わる。この4人が義の道を説く者となること。
モーサ27,1,無信者たちが教会員に加える迫害が非常にひどくなったので、教会の聖徒たちがつぶやいてこれを司たちに訴え、またアルマにもこれを訴えた。それでアルマはこの事件をモーサヤ王に告げたので、王はこのことをその祭司たちに議った。
モーサ27,2,その結果モーサヤ王は全国にふれを廻し、無信者が神の教会に属する者を迫害することを禁じた。
モーサ27,3,またきびしい命令がすべての支部教会にくまなく行きわたった。すなわち、教会員は互に迫害してはならない。人は上下の差別なく全部平等でなくてはならない。
モーサ27,4,人は傲慢不遜にかまえて平和を破ることがあってはならない。人は自分を尊ぶように隣人も尊ばなくてはならない。人は各々自分の暮しを立てるために自ら働かなくてはならない。
モーサ27,5,また、すべての祭司と教師とは病気にかかったり非常に貧しくて困ったりする時のほかは、自分の暮しを立てるために自ら働かなくてはならないと言うのであって、聖徒らはこの命令を守ったので神の恩恵を豊かに受けた。
モーサ27,6,これから国内はようやく平和にかえり、民の数は非常に多くなって次第東西南北にひろがり、国内いたるところに大きな都市や村を建てた。
モーサ27,7,そして主は民を恵んで栄えさせたもうたから、かれらは富んだ大きな国民となった。
モーサ27,8,ところがモーサヤの息子たちは無信者の仲間に入っていた。またアルマの息子の1人もそうであった。この息子は父の名をとってアルマと呼ばれたが、かれは非常に罪深い男で邪神を信じ、言葉が多くてよく人にへつらい、多くの者をまどわして自分のしているような罪
モーサ27,8-1,犯させた。
モーサ27,9,この男は人の心をいざなって民の間にいざこざを起し、神の仇に民の心を司どらせたから神の教会が盛になることを非常にさまたげた。
モーサ27,10,また神の命令にも王の命令にも逆らってモーサヤの息子たちと共に神の教会を亡ぼし、主の聖徒らをまどわすために、ひそかに歩きまわっていた。
モーサ27,11,このようにかれらが神にそむいて歩きまわっていた時、主の使いがかれらに現われ、あたかも雲の中に居るかのように降りてきて、ちょうど雷のような声を立てて物を言ったので、その声はかれらの立っている地をふるい動かした。
モーサ27,12,それでかれらは地上に倒れるばかりに驚き、この使いの言った言葉がなんであるか解らなかった。
モーサ27,13,しかしその使いはまた大きな声で”アルマよ、起きてわが前に立て。汝は何故に神の教会を迫害するか。主は’これわが教会なり、われはこれを立てて守るべし。さればわが聖徒らの罪悪のほかこれを覆すものなかるべし’と仰せになった。”と言い、
モーサ27,14,また”見よ、主はすでにその聖徒らの祈りも神の僕である汝のアルマの祈りも聞きとどけたもうた。汝の父は汝に真理を知らせようとして下腿信仰をもって汝のために祈った。それであるから、神の僕たちの祈りがそれぞれの信仰に応じて聞きとどけられるよう、われは
モーサ27,14-1,神の権能と威力とを汝に認めさせるために来たのである。
モーサ27,15,汝は神の能力を疑うことができるか。見よ、わが声は地をふるい動かすではないか。また汝はわれが汝の前に立っているのが見えないか。われは神からつかわされた物である。
モーサ27,16,汝の親たちがヒーラムの地とニーファイの地とに束縛されていたことを思い起せ。汝の親たちは奴隷であったが神はすでにかれらを救い出したもうた。アルマよ、われは汝に言う。行け、たとえ自らの心によって神に捨てられるとも、教会の聖徒らの祈りが聞きとどけら
モーサ27,16-1,またと教会を亡ぼそうとしてはならない”と言った。
モーサ27,17,これは天使がアルマに言った最后の言葉である。こう言ってその天使は立ち去った。
モーサ27,18,ここに於て、アルマとアルマと共に居た物たちは非常に驚いてまた再び地上に倒れた。なぜならば、かれらは自分の目に主の使いを見、その声が雷のように地をふるい動かしたから、裂けるばかりに地をふるい動か

すものは神の能力のほかにないことを知ったからである
モーサ27,19,この知己アルマは非常に驚いたために唖となって物を言うことができず、また能力が弱くなって手を動かすことができなかったから、自分で動くこともできずつれの者に担がれてその父の前に置かれた。
モーサ27,20,つれの者は今逢ったことをすっかりアルマの父に話して聞かせたところ、父はそれが全く神の御力であることを知って大いに喜び、
モーサ27,21,主が自分の息子とそのつれの者になしたもうたことを目のあたり知らせようとして、大勢の人を呼び集めた。
モーサ27,22,そして祭司たちも集まらせたが祭司らはその主なる神に断食をして祈りはじめ、息子のアルマが物が言えるようにその口を開いて下さるよう、またその手足を強くして下さることと、民の目を開いて神の恩恵と栄光とを認めさせて下さることとを乞い願った。
モーサ27,23,このようにして祭司たちが二日二晩断食して祈ったところ、息子のアルマは手足に力を得てたち上り、かれらに物を言いはじめ、心配しないで喜んでくれと言った。
モーサ27,24,そしてアルマは"私はすでに罪を悔い改め主に贖われた。ごらん、私は"みたま"によって生れた。
モーサ27,25,主は私に'天下の万民は男女を問わず、あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、あらゆる人々にいたるまでみな新たに生れざるべからることを怪しむなかれ、人はみな神によりて生れ、その堕落したる肉欲の有様より義しき有様に移り、神に贖b◆黷ト神の息・
モーサ27,25-1,娘とならざるべからず。
モーサ27,26,かくて人は新なる者となる。しからざれば決して神の王国に住むことを得ず'と仰せになった。
モーサ27,27,私はあなたたちに証をする。人がもしこのように新な者にならなければ必ず捨てられるのであると。私は1度まさに捨られようとした者であるから、よくこのことを知っている。
モーサ27,28,しかし私は大いに苦しんでさまよった末、死ぬほどの苦痛を感じて悔い改めたから、主は私を憐みたもうてとこしえに燃える火の中から救い上げることがふさわしいと考えたもうた。このようにして私は今神によって生れたのである。
モーサ27,29,私の身も霊も罪の縄目にしばられ苦汁を飲まされる思いの不幸な有様から贖われた。私は前に底なしの位穴の中に居たが、今は神のおどろくべき光を見ている。私の身も霊も前に家員の責苦によって裂けんばかりに苦しんだが、今は救い上げられてもう苦痛を感じない。
モーサ27,30,私は前に私の贖い主に贖われることを拒み、私たちの先祖が教えた教えを信じなかったが、今は私たちの先祖が贖い主の将来降臨したもうことを先見できることを知っている。また贖い主は自分が造った一切のものを忘れたまわないこと、また贖い主は万民に現われたも
モーサ27,31,万民は確にその御前にひれ伏して告白をするようになること、終りの日に万民が贖い主に裁判を受けるために立つ時かれらは贖い主が神であると認めること、またその時神を信ぜずに世を渡った者たちが今自分たちに永遠の罰を下す裁決を正統であると認めて、あらゆる
モーサ27,31-1,見通す神の目の下に恐れおののいて縮み上ることを知っている"と言った。
モーサ27,32,これから後アルマは天使が現われた時一しょに居た者たちと共に、民に教えを伝えはじめ、全国を廻って歩いて自分の見たこと聞いたことを1人のこらずの国人に証をし、多くの艱難があるにもかかわらず神の道を宣べ、無信者から大いに迫害を受けまたその多くの者か
モーサ27,33,これをつらいとも思わず、かれらはねんごろに教会員を慰め、その信仰を片目、忍耐強く苦心して教会員たちに神の命令を守らねばならぬと勧めた。
モーサ27,34,その中の4人はモーサヤの息子であってアンモン、アロン、オムネル、ヒムナイと言う。以上はモーサヤの息子たちの名である。
モーサ27,35,かれらはゼラヘムラの全国とモーサヤ王の治めているすべての民の間を経めぐって、自分らが前に教会に加えたすべての害を除くために一生けんめい全力をつくし、一切の罪を告白し、自分たちの見たすべての言を諸人の前で証し、かれらの言葉を聞きたいと言ったすべ
モーサ27,35-1,人々にいろいろな予言と聖文とを説明した。
モーサ27,36,このようにして、かれらは神の御手に使われて多くの人に真理とかれらの贖い主の言を知らせたのである。
モーサ27,37,ああ、かれらはいかにも幸福ではないか。かれらは平和を布き、善の良い音信をつたえ、主が治めたもうことを民に告げたからである。
モーサ28,,モーサヤ書　第28章
モーサ28,*-*,モーサヤ、自分の息子たちにレーマン人に教えを説くことを許す。24枚の金版翻訳される。アルマの子のアルマ、その記録を保管する。
モーサ28,1,モーサヤの息子たちは以上のことを為し終ってから少しばかりの人をつれて自分らの父である王のとこ

ろへ帰り、その同胞であるレーマン人に自分らがすでに聞いたことを教え、また神の道を伝えるために、自分らが選んでつれてきた人々と一しょにニーファイの地へ行
モーサ28,1-1,許してもらいたいと父にねがった。
モーサ28,2,それは、このようにしたならばレーマン人にその神である主のことを悟らせ、その先祖の罪悪を認めさせ、ニーファイ人に対する憎悪の念をなくさせ、その神である主を信じて喜ばせ、ニーファイ人と互に親しませて、かれらの神である主が両方に与えたもうた全地にも
モーサ28,2-1,起らないようにすることができるかと思ったからである。
モーサ28,3,モーサヤ王の息子たちはまた万民に救いの道を教えたいと思った。それは1人といえども亡びることを考えるに忍びず、また1人といえども永遠の責苦を受けることを思ってさえもかれらはふるえおののいたからである。
モーサ28,4,このように主の"みたま"はモーサヤ王の息子たちを感動させた。かれらはもと罪人の中でも最も卑劣な者であったが、主はその限りない憐みを垂れてかれらを救うのがふさわしいことと考えたもうた。それでも、かれらは自分らの罪悪のためにその心を非常に苦しめ、
モーサ28,4-1,永遠に捨てられはせぬかと思って大いに心配をし苦しんだ。
モーサ28,5,それであるから、かれらはニーファイの地へ行くことを許されるために何日もその父に嘆願をした。
モーサ28,6,そこでモーサヤ王は主に祈って、伝道をするために息子たちをレーマン人の間に行かせるべきかどうかを伺った。
モーサ28,7,すると主はモーサヤに命じて仰せになった"汝の息子らに行かしめよ。多くの人がその言葉を信じて永遠の生命を受ける故なり。われは汝の息子らをレーマン人の手より救い出さん"と。
モーサ28,8,モーサヤ王は息子たちが望の通りに行って働いてよいと許しを与えた。
モーサ28,9,そこで息子たちはレーマン人の間に伝道をするために荒野へ旅立った。私はこの息子たちがしたことを後に書き誌そう。
モーサ28,10,さてモーサヤ王にはその息子の中に王の位をつぎたいと思う者が1人もなかったから、王の位をゆずって伝える者がなかった。
モーサ28,11,モーサヤ王はリムハイの民が発見し、リムハイからモーサヤに伝えられた金版の記録を翻訳して書き取らせてから、真鍮版に刻んだ記録とニーファイ版と神の命令に従って自分が保存した一切のものをまとめた。
モーサ28,12,モーサヤ王がリムハイから伝えられた金版にのっている記録を翻訳したのは、王の民が切望したからであって、民は前に亡びてしまった国民のことを非常に知りたいと思った。
モーサ28,13,モーサヤ王は弓形のものについている。2つのわくにはめたあの2つの宝石を使ってこの記録を翻訳した。
モーサ28,14,この器は世の始めから用意されたものであって、異う言語を訳するために代々伝えられ、
モーサ28,15,主の御手によって保存されていた。主はこの器をもってこの地に住む一切の者に、主が選びたもうた民の罪悪と憎むべき行いとを示そうと思いたもうからである。
モーサ28,16,この器をもつ者は昔言われたように聖見者と言う。
モーサ28,17,さてモーサヤ王がこの記録の翻訳をしてみると、その中には亡びた民のことが書いてあり、それからさかのぼって主が世の人の言葉を乱し世の二途を全世界に散らしたもうたころに人々が建てた大きな塔のことと、またずっとさかのぼってアダムが造られた時のことまで
モーサ28,17-1,書いてあった。
モーサ28,18,この記事を四でモーサヤ王の民は酷く嘆き、悲しみで胸がふさがったが、またこの記事によって喜ばしい多くのことも知った。
モーサ28,19,この記録にのっていることを知るのは万人にとってぜひ必要であるから、、後に私は書き記そう。
モーサ28,20,さて私がすでに話したようにモーサヤ王は以上のことをしてから、真鍮版と自分が保存した一切のものをアルマの子であるアルマに伝え、また一切の記録と解訳器もアルマに与えて、これを保存しなくてはならぬことと、国民の記録を書きつがなくてはならぬことと、ま
モーサ28,20-1,またこのもろもろの記録は、ちようどリーハイがエルサレムを去った時から伝わったようにこの後も代々これを伝えようと命じた。
モーサ29,,モーサヤ書　第29章
モーサ29,*-*,国を治める道に関するモーサヤ王の説教。代議政体を推奨する。判事たちが選ばれる。父アルマの死。モーサヤ王の死によってニーファイ人の王の治世終る。
モーサ29,1,モーサヤ王はアルマにいろいろな記録や保存しなくてはならぬ貴重な器を伝えてしまうと、誰がその国の王になるべきかについて民の意見を知るために全国に使をつかわした。
モーサ29,2,すると民が答えて"われわれは汝の息子のアロンが王となってわれわれを支配することを望む"と言っ

た。
モーサ29,3,ところがアロンはニーファイの地へ行って国に居なかったから、王の位をアロンにゆずることはできない、アロンも王の位をつぐ心がなかったし、モーサヤ王のほかの息子たちも1人として王になりたいと言うものはなかった。
モーサ29,4,それでモーサヤ王はまた布告書を民の中にまわし、次のように書いて知らせた。
モーサ29,5,”見よ、わが臣民よ。いな、わが同胞よ。われはまことに汝らを同胞と思う。汝らは王を持ちたいと思うが故に、ねがわくはわれが今汝らに述べんとする汝らがよくよく考うべき事をとくと考えよ。
モーサ29,6,われ汝らに告ぐ。今当然王位をつぐはずの者は辞退してこれを受けようとしない。
モーサ29,7,もしほかの者を代えて王とするならば汝らの間に不和の起る恐れがある。それは当然王位をつぐ権利のあるわが子が、後に怒って民の一部をいざない見方に引き入れることがないとも言えないからである。もしそうなると、汝らの中に戦と不和しきりに起り、そのために
モーサ29,7-1,多くの血を流し、主の道を曲げ、多くの民の身も霊も亡ぼすようになるであろう。
モーサ29,8,われ汝らに告ぐ。われらはよろしく智恵を出してこれらのことをよくよく考えよう。われらがわが息子を亡ぼすすじもなければ、わが息子の代りにほかの者を王にしてからこれを亡ぼすすじもない。
モーサ29,9,わが息子がもしも再び高慢な心とつまらぬ行いにかえるならば、自分が前に言ったことを取り消して自分に王の位をつぐ権利があると主張するであろう。そうすれば、わが息子もこの民も多くの罪を犯すことになる。
モーサ29,10,われらはよろしく智恵を出してあらかじめこれらのことをよく考え、この民の平和になることを計らなくてはならぬ。
モーサ29,11,故にわれは生涯ののこりをやはり汝らの王として過そう。しかし見よ、われらはよろしくわが国法に従ってこの民を裁判する判事らを任命し、また神の命令に下が手この民を裁判する賢い人を選んで判事とし、この民のまつりごとを新に整えよう。
モーサ29,12,人が神に裁判をされるのは、人に裁判をされるよりは優っている。神の裁判はいつも義しいけれども人の裁判は必ずしも義しくないからである。
モーサ29,13,故にいつも神の律法を行わせ神の命令に従ってこの民を裁判し、あたかもわが父ベンジャミンのようにこの民のために力をつくす義しい人を選んで王とすることができるならば、常に汝らを治める王があるのもよいであろう。
モーサ29,14,われは戦争、不和、盗み、掠奪、殺人そのほか何らの悪い行いがないように、汝らに神の命令を教え全国に平和を布く目的で才能の及ぶかぎりをつくしてきた。
モーサ29,15,罪悪を犯す者は、これをわれらの先祖から伝わった法によって罰してきた。
モーサ29,16,さて、すべての人は必ずしも正しくないから、一人であると数人であるとにかかわらず、汝らを治める王がある必要はない。
モーサ29,17,見よ、ただ1人の悪い王が行う悪事とかれが招く滅亡はいかにも大きいではないか。
モーサ29,18,ノア王を思い起せ。ノア王とその民が犯した罪悪と憎むべき行いとを思い起せ。見よ、かれらの受けた滅亡はいかにもひどいではないか。かれらはその犯した罪悪のために奴隷にされた。
モーサ29,19,かれらがもしも真面目に悔い改めて、かれらを造りたもうた全智の造り主の助けを受けなかったならば、かならず今日まで奴隷の境涯に止まっていたにちがいない。
モーサ29,20,しかし、かれらはその造り主の御前にへりくだったから造り主はかれらを助けたもうた。またかれらが大いにその造り主に嘆願をしたから、造り主はかれらを奴隷の境涯から救い出したもうた。どの場合にも、このように主はその大きな力をもって世の人の間に働きたま
モーサ29,20-1,主にたよる者に憐みの手を伸したもう。
モーサ29,21,見よ、民はひどく争い戦い、多くの血を流さなければ悪い王をやめさせることができない。
モーサ29,22,なぜならば、その悪い王には同じような罪悪を犯している悪い友がありまたいつも護衛の兵をつれている。かれは自分の前に正義を以て国を治めた人の法律を廃し、神の命令を足の下にふみにじり、
モーサ29,23,自分の罪悪にかなう法度を立ててその民に発布し、その法度に従わない者はみなこれを殺させ、自分に背く者と戦うために軍隊を出し、できるなら反対者を亡ぼす。このように正しくない王はあらゆる義しい道を曲げるのである。
モーサ29,24,見よ、このような悪事が汝らにあってはならない。
モーサ29,25,従って汝らはわれらが先祖から受けた国法によって裁判をされるよう、民の投票によって判事らを選べ。先祖から伝わった国法は義しいものであって、主がわれらの先祖に賜うたものである。
モーサ29,26,民の大半が不正なことを求めるのは稀であるが、その小数が不正なことを求めるのは普通にある。故に汝らはよろしく民の賛成同意を得てまつりごとを行うことを国法の1つとして守れ。
モーサ29,27,もしも民の大半が悪を選ぶ時がくるならば、これは神の裁きが汝らに降る時であって、神がこれまでこ

の地を破壊したもうたように、大いに汝らを破壊したもう時である。
モーサ29,28,もし汝ら普通判事があるのに、この普通判事がすでにきまった国法に従って汝らを裁判しなかったならば、汝らはその普通判事を高等判事の裁判に附することができる。
モーサ29,29,またもし高等判事たちが正統に裁判をしないらば、汝らは小数の普通判事らを集めて、これらに民の賛成同意を得させて高等判事らを裁判させよ。
モーサ29,30,われは汝らが主をおそれながらこれらのことをして王をもたないように命ずる。もしこの民が罪を犯して悪事を行うならば、その罪悪の責はこれは行う者に帰せよ。
モーサ29,31,多くの国の民の罪はその王の悪事によって生じたのである。故にその罪はこのような王に帰する。
モーサ29,32,そもそもわれはこの後この地、とくにこのわが民の中にこのような階級の不動がもうこれからないことを望み、また主が生きてこの地を保つことをわれらに許したもう間、ならびにわれらの子孫がこの地に生きながらえる間、この地が自由の国となり、人がみな等しく権
モーサ29,32-1,特権とを受けTこれを行使することを望む”と。
モーサ29,33,モーサヤ王はこのほか多くのことをその民に書き送り、義しい王の困難と憂いと民のためを思う心の苦しみと、民が王に訴えるいろいろな不平とを書いて明らかにこれを説明し、
モーサ29,34,このようなことがあってはならないことと、全国民が責任を分担して、人はみな自分の責任を負わねばならぬことを話し、
モーサ29,35,また不正な王が治める時にその民の受ける不利益と、
モーサ29,36,不正な王の悪事、憎むべき行い、戦争不和、流血、盗み、掠奪、みだらな行いそのほか一々あげて数えきれないもろもろの罪悪とを述べ、このようなことがあってはならないことを話し手、これらが明らかに神の命令に背くものであると言った。
モーサ29,37,モーサヤ王がこの布告書を民の間につかわしたところ、民は王の言葉を本当であると認め、
モーサ29,38,王を持とうとする望みをすてて、全国の民がみな平等の機会を得ることを熱望するようになり、各人がみな自分の罪の責任を受けることを承諾した。
モーサ29,39,ここに於て、国民は先祖かた伝わった国法によって自分たちを裁判する判事となる人々を投票で選挙するために、国中各所に固まって集ったが、みなすでに与えられた自由を非常に喜んだ。
モーサ29,40,かれらはモーサヤ王を愛する情がいよいよ深くなり、誰よりも1番王を敬った。かれらは王が身も霊も汚す利益をむさぼる暴君であるとは思わなかったからである。王は民の宝を取り立てず、人の血を流すことをたのしいと思わず、国内に平和を布き、その民をあらゆる
モーサ29,40-1,救った。従って民は本当に限りなく王を敬った。
モーサ29,41,さてモーサヤ王の民は自分たちを治め、国法によって裁判する判事を選んで任命し、全国を通じてこのようにした。
モーサ29,42,このときアルマは第1の大判事に任ぜられたが、またかれは大祭司でもあった。アルマの父はかれに大祭司の職務をゆだね、教会のあらゆる事を取り計う権限を与えた。
モーサ29,43,アルマは主の道を歩み、主の命令を守り、義しい裁判をしたから国中たえず平和であった。
モーサ29,44,判事たちがゼラヘムラの全地を通じて、ニーファイ任と呼んだ民を治める時代はこのようにして始まり、アルマはその最初の大判事であった。
モーサ29,45,アルマの父は全く神の命令をなしとげるまで生き永らえ、82才で亡くなった。
モーサ29,46,モーサヤ王もその在位の第33年に年63で亡くなった。時はリーハイがエルサレムを去ってからすべてで509年であった。
モーサ29,47,これでニーファイの民を治めた代々の王の治世時代が終り、民の教会を創立した人アルマの生涯もまた終った。